

幻想野球異変

紗夜絶狼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは現実世界から忘れ去られた者達だけが住まうこととを許される世界、その名は「幻想郷」毎日が平和で穏やかな日々が続いている。しかしそんな幻想郷にとある異変が起きる。「野球異変」である。幻想郷の人里近くの平原に、突如として現れた野球場。人々は混乱する中、八雲紫は、外の世界からとある人間を、助つ人として招集する。その後、幻想郷にやつてきた一人の元プロ野球選手。八雲紫は、この野球異変の解決を、この男に託したのだつた。

果たして幻想郷に、再び平和の日が訪れるのか？

※この物語は1人の元プロ野球選手が幻想郷の少女達と協力し、この「野球異変」を解決していくストーリーとなっています。

そして私の初めての作品（処女作）です。

二次創作のためキャラクターのイメージが違う場合がございます。
それでも大丈夫だと言う方はゆつくりしていってね。

目 次

第1章 集え幻想ナイン

第1話	二人の少女との出会い	1
第2話	白黒の魔法使い	4
第3話	集結？魔理沙が連れてきた異変解決メンバー	6
前編		
第4話	集結？魔理沙が連れてきた異変解決メンバー	1
中編		
第5話	集結？魔理沙が連れてきた異変解決メンバー	9
後編		
第2章 忘れ去られし球団		
第6話	衝撃!? 幻想入りしたチームの正体	19
第7話	神戸ブルーウエーブ VS 大阪バファローズ	24
第3章 結成夢のオールスター		
第8話	始動！幻想郷ドリームズ	29
第9話	前途多難な投手陣	33
第10話	魅せる決め球	37
第11話	マヨヒガでの騒ぎ	42
第12話	紅美鈴の苦悩	45
第13話	交わされた約束	49
第14話	緑の稻妻少女	53
第15話	運命のスターティングメンバ	57
第16話	容赦のない洗礼	62
第17話	華麗なる夜の吸血鬼姉妹	66
第18話	新たなる刺客	71

77 71 66 62 57 53 45 42 37 33 29 24 19 13 9 6 4 1

第19話	運命のシナリオ
第20話	青き戦士たちの猛攻
第21話	安打製造機の追撃アーチ
第22話	青波の最終秘密兵器

98 93 87 83

第1章 集え幻想ナイン

第1話 二人の少女との出会い

「ううん… ふあ～俺は寝ていたのか？」

サブローはゆっくりと目を開ける。

「というかここはどこだ？ 俺はベットで寝ていたはず…」

しかしどうやら俺が眠っていた場所は民家の縁側のだった。しかしここはどこなんだ？ 俺は辺りを見回す、すると目の前の光景に安然とした。なんと九本の尻尾が生えた女性に二つの尻尾を生やした女の子が仲良く遊んでいた。サブローは言葉を失つた。すると後ろから。

「ようやくお目覚めのようね」

「やつと起きたわね」

俺の耳に二人の女性の声が入ってきた。すぐさま振り向くとそこには導師服？ を着た女性に紅白の巫女が立っていた。俺はすぐさま「誰なんだ君たちは！」と驚きの声をあげた。すると導師服を着た女性が自己紹介を始めた。

「あら～自己紹介が遅れたわね、私は八雲紫、貴方をこの幻想郷に連れてきた張本人よ」

八雲紫に続き隣の紅白の巫女も続けた。

「私は博麗靈夢。この幻想郷を守っている巫女よ」

八雲紫と博麗靈夢による簡単な自己紹介が終わり、次にサブローも自己紹介をした。

「俺は涌井三郎。先日引退した元プロ野球選手さ」

サブローも簡単に済ませた。すると八雲紫はこう続けた。

「涌井三郎、20??年のドラフト会議にて幕張マリーンズにドラフト一位で入団。当時甲子園に四度出場し、高校通算89本を誇る左の大砲として世間の注目を浴びた。プロ野球選手となり一年目には144試合に出場し、3割30本100打点を記録。その年の新人王を獲得して、二年目の活躍を期待されたが、開幕戦にて頭部にデッドボール

ルを受け頭蓋骨骨折の大怪我を負う。その後復帰したもののが復活することが出来ずに $20 \times$ 年に事実上の引退をした悲しき大砲よね？」

八雲紫は俺の経歴を事細かに説明して見せた。靈夢は

「凄そなのは分かつたけど、この涌井三郎？が今回の異変の救世主なの？」

すると紫は指を指しながら「そうよ。そして涌井三郎さん貴方は今日から幻想郷で起きた野球異変の救世主なの！」とまるで王様が勇者に試練を与えるみたいに言つた。すかさずサブローはこう返した。

「だがその野球異変？を解決するには俺の力が必要なのは分かつた。だが具体的に何をすればいいんだ？」

少し考えて紫は返答した。

「簡単に言えば貴方が今日から野球チームのキヤプテンとなりこの異変を解決するの！」

と声を高らかに上げて言つた。

「いやいや待て待て、チームのキヤプテンは分かつたが肝心の他の選手は？監督は誰がするんだよ！」

俺はすぐさま疑問を投げかけた。

「野球に必要なメンバー（サブローを覗いて）27人全員は予めこちらで選抜してあるわ。あと監督は私ね、もう少ししたらメンバーが来るはずよ。あと貴方にこれを渡しておくわ」

そういうつて紫はサブローにあるカードを手渡した。

「幻想郷ではスペルカードというものがあるのだけど、今回はそれが使えない異変だからそのプロ野球カードを使い解決して欲しいの」

紫はこう付け加えた。すると俺はすかさず

「いやいやまずスペルカードは何か教えてくれよ！」

紫は簡潔に説明した。

「スペルカードは簡単に説明すると、その個人に与えられる必殺技カードみたいなものよ。あとさつきも言つたけど、この異変はスペルカードが使えないの、だからこの選手の魂が宿ったプロ野球カードをスペルカード代わりとしている。あとそのカードに描かれてる選手の能力は全盛期の時の能力だからかなり強いはずよ」

サブローは少々無理矢理感が半端ないと思つてはいたが自分を必要としてくれる人がいるのなら協力しようと八雲紫と博麗靈夢に伝えた。すると遠くから別の女性の声が響き渡ってきた。

「お～い紫～！お前に呼ばれたメンツを連れてきたぞ～！」

サブローは声のした方を振り返るとそこには目を疑うような光景が広がっていた。

第2話 白黒の魔法使い

よく見ると白黒の魔女？のような女の子が、異変解決メンバーを連れてきたらしいが、メンバーが予想以上に個性豊かだつた。明らかに鬼のような角が生えている長身の女性に、まるで子供のように小さい女の子に、手に包帯を巻いていたり、尻尾が生えていたりとメンバーが異様である： そんな中先程紫に呼びかけた白黒の女の子が俺に話しかけてきた。

「お前が紫の言つてた異変の救世主か？なんだか頼りない顔してんなW」

白黒魔女は笑い混じりに言つてきた。そしてその流れで自己紹介をしてきた。

「おつとすまない、私の名前を言わなきやだな、私は霧雨魔理沙。魔法の森に住んでる魔法使いだぜ！よろしくな！」

「俺は涌井三郎だ、よろしくな！」

俺も名前だけだが挨拶を交わした。そして魔理沙にこう問いただした。

「ちなみに魔理沙も異変解決に協力してくれるメンバーの1人なのか？」

「そうだぜ？ なんたつて数々の異変を解決してきたのは靈夢と私なんだぜ？もちろん、この異変も解決するために来たんだ」

魔理沙は自慢そうに俺に言つてきた。とりあえず俺は、紫から渡されたプロ野球カードを魔理沙に渡した。すると、渡したカードが突然光輝いた。

「うわっ！ なんだなんだ！」

「なんだよこれは！」

「爆発とかしないよな」

俺と魔理沙は驚きのあまり声をあげた、すると紫が補足を説明してくれた。どうやらメンバーにカードを渡すと、なんの選手の能力なんかが分かるらしい。ようやくカードは発光するのを止め、普通の力一ドに戻った。

「さてさて魔理沙に宿つたプロ野球選手は誰かな？」

俺は内心ドキドキしながらカードを確認した。しかし次の瞬間言葉を失つた。なんと魔理沙に宿つたのは名古屋ドラゴンズの松坂泰介投手！しかも埼玉時代の全盛期。驚きを隠せない俺に魔理沙は声をかけた。

「このカードに描かれてる選手はそんなに凄いのか？」

俺は興奮しながらすぐさま答えた。

「ああ、凄いも何も日本の怪物だよ！全盛期には日本のエースとして世界大会にも出場した選手なんだよ」

サブローは続けざまにこう言つた。

「155km越えのストレートに、切れ味抜群のスライダーとカーブなど、まさにエースと呼べる投手だよ」

魔理沙はそれを聞いて自慢気に

「なるほど、つまりこの魔理沙様に相応しいカードだな！」

魔理沙は機嫌になつていていた。とその前に魔理沙の連れてきたメンバーを紹介して貰わなきやいけないんだつた。

「魔理沙。その異変解決のために連れてきたメンバーを紹介してくれないか？」

その言葉を聞いて、本来の目的を忘れつつあつた魔理沙は、すかさず俺に異変解決メンバーを紹介してくれた。

第3話 集結？魔理沙が連れてきた異変解決メンバー 前編

魔理沙は俺にメンバーを丁寧に紹介してくれた。

「まず一人目は星熊勇儀、地底の旧都に住んでいる鬼の四天王の一人だぜ」

サブローは察した。やっぱり最初見た鬼のような角は本物だったんだと…

「凄い本物の鬼だ… 存在しないと思つてた…」

「大丈夫だ、ここにいる奴らはみんな人は襲わない奴らばかりだぜ？だから安心しな！」

「まあ異変解決メンバーなんだから大丈夫だよな？」

サブローは安堵の息をついた。そしてサブローは星熊勇儀にカードを手渡した、すると再びカードは光を放ち元に戻る。カードを確認するところちらも驚愕の選手だつた。

「これは… 元埼玉ライオンズのアレックス・ラブレラ！」

「過去にシーズン55本墨打を記録したカリブの怪物。パワーのみならずアベレージも高い最強助っ人と名高い外国人選手…」

「とりあえず私にぴつたりだな。私はパワーなら幻想郷トップクラスだからな」

サブローは驚きながらも魔理沙に他のメンバーを紹介してもらいつつ、メンバーにカードを渡していく。

「次は一気に一人紹介するぜ！紅魔館の門番の紅美鈴と、メイド長の十六夜咲夜だ」

「初めてまして、紹介されました十六夜咲夜です」

「私は紅美鈴です、よろしくお願ひしますねサブローさん」

サブローは二人にカードを手渡す。二人に宿つたのは、名古屋ドラゴンズの不動の二遊間の荒垣雅博選手と井畠弘和選手だつた。咲夜が井畠選手で美鈴が荒垣選手と、紅魔の二遊間が完成した。
「二人にピッタリだよ。この2選手は、プロ野球史上最高の二遊間と

も呼び声が高いんだ。君たちならきっと最強の二遊間が組めるよ」「美鈴と二遊間？貴方サボらないでよね」

「いやいや流石に異変解決の時は寝ませんよ！」

「異変解決の時は？」

「ごめんなさい、冗談ですよ」

「とにかく喧嘩はやめてくれよ、この異変にはチームワークが大事なんだ」

サブローの一言で、咲夜と美鈴は落ち着いたみたいだ。

「魔理沙、次は誰なんだい？」

「私ですよ～!!」

魔理沙が紹介する前に飛び込んで来たのは黒い羽が生え天狗のような団扇を持つた少女だった。

「初めましてサブローサン。私は清く正しいをモットーとしてます射命丸文と申します！是非ともサブローサンを取材させてください！」「とりあえず落ち着いて、今は先に君の能力を知りたいからカードを渡すよ、取材なら最後に受けるから」

なんとか文の勢いを止め、俺は文にカードを渡す。

「これは元関西タイガースの赤い彗星こと紅星憲広選手じゃないか！実働年数は短かつたけど、シーズン60盗塁をした程の脚力を持ち、打撃でも3割を打つリードイングヒッターだ」

「あやや～、幻想郷最速の私に相応しいカードですね～」

文は魔理沙同様、自慢そうにしていた。

「よし次は誰だい？」

「私ですかね？」

すると後ろの方から、照れくさそうな表情を浮かべて俺の前に來た。

「君の名前は？」

「私は寅丸星と言います。一応毘沙門天様の代理を務めています。よろしくお願ひします！」

「毘沙門天つてあの戦いの神様の!?これは心強い！」

サブローは感情を高めつつもカードを手渡す。

「これは… 現関西タイガースの鳥鷹敬選手だ。100打点を記録したことのある遊撃手だな」

「なにやら凄そうな選手ですが頑張ります！」

「よろしくな寅丸」

するとリズムよく魔理沙が「次は六人目だぜ！」と言つたので、すぐさま紹介に移る。

? 「なら私の番だな」

何やら大人びた言葉が聞こえてきた。するとサブローは言葉を失つた。なんと声の主は、俺が目覚めて最初に目にした尻尾が九本生えている女性だった。

「初めましてサブロー殿、私はそこに居られる紫様の式神である八雲藍と言う。よろしく頼む」

詳しく述べ聞くと、どうやら藍は、幻想郷では最強の幼獣であり頭脳系らしい。そして俺は、藍にカードを手渡す。

「…！」

俺はまた目を疑つた。

「これは元神宮スワローズの古畑敦也選手！ ID野球の申し子と言われ攻守ともに、歴代トップクラスの最強捕手。しかも盗塁阻止率も非常に高い頭脳派捕手でもある」

「つまりこの私が、チームの要みたいなことだな」

「まあそんな感じです。ではよろしくお願ひします」

「ああ、こちらこそ」

これでメンバーはサブローと魔理沙を含め八人が判明した。サブローは思つた、この後どんなレジェンド選手が飛び出すのかと震えていた。

「驚け〜〜〜〜〜〜〜〜!!」

「うわあ〜!なんだなんだ!?」

いきなり叫ぶような大きな声を出されて俺は腰を抜かした。一体この声の主の正体は何者なんだ？

第4話 集結？魔理沙が連れてきた異変解決メンバー 中編

あまりにも突然すぎて、俺は腰を抜かした。一体何が起こったのだろうか…

「やつた～驚いてくれた～!! わちきお腹いっぱい」

目の前には、一目と、俺の身長の半分はある垂れてる舌がついてる紫色の番傘を担いだ女の子が立っていた。

「びっくりしたな～、君は誰だ？」

「わちきは多々良小傘。立派な付喪神だぞ～、怖いでしょ？」

「とりあえず、君も魔理沙が連れてきたメンバーなんだね？」

「そうだよ。急に魔理沙が、わちきをここまで来るようになると伝えられたから来たんだよ」

「とりあえず君にもこのカードを渡すね、あと俺は涌井三郎、サブローツて呼んでくれよな」

「わかつた！ よろしくねサブローさん」

多々良小傘に宿つたカードは、現仙台イーグルスの今川敏晃選手。能力は幕張マリーンズ時代だ。

「今川選手か、幕張時代は日本シリーズとかの短期決戦に滅法強くて、意外性が高い選手なんだ」

「わちきの何の関係があるかは分からぬいけど、とにかく頑張るよ！」

小傘は満面な笑みに元気いっぱいな返事をした。すると。

「ようやく私の出番ね、来なさうどんげ！」

「いやいや今私のつて言いましたよね師匠！」

「とりあえず来なさい！あとで新薬の実験台にするわよ？」

「ひい～！ 今行きます～！」

何やら一気に騒がしくなるこの場、魔理沙の後ろから二人の女性が出てきた。

「初めてサブローさん、私は八意永琳という者です。永遠亭にて医者をしています、そして私の隣にいるのが」

「初めまして、私は鈴仙・優曇華院・イナバと言います！あと薬売りをしていて、師匠の弟子でもあります！よろしくお願ひします！」

「医者に薬売り……これなら誰かが怪我をしても大丈夫だな、心強いよ。あと二人にカードも渡しておくよ」

八意永琳と鈴仙に宿つたカードも判明した。

「まずは八意先生、貴方のカードは、現関東ジャイアンツの阿倍野慎助選手。ある年は、関東ジャイアンツの捕手として活躍し、捕手ながら打率3割に100打点を記録して、その年のリーグ優勝にも貢献したんだ」

「なるほどね、藍とは違った攻撃的捕手って訳ね。面白いじゃないの」「そして鈴仙なんだけど、君は現仙台イーグルスの則木昂広選手だ。能力は今まで紹介した中でもまだ若いけど、15勝を挙げていて、しかも奪三振数はリーグトップだった年の能力だ。まさにドクターKだね」

「つまり私は投手？というポジションですか。なんとか頑張ります！」

「二人でバッテリーも組めるから面白いかもな！」

なんとまさかの師弟バッテリーが偶然にも実現してしまった。これはまた期待が膨らむ展開となつた。

「きてきて次は誰かな？なんかワクワクしてきたな」「次は私だな」

この言葉を聞いたサブローは驚愕した。まだ近づいてもいらないのに、威圧感のような感じが身体中を駆け巡る。「どうしたんだいサブローよ、聞いているのか？」

ようやく謎の威圧感が消え顔を上げると、そこには緑色の長髪に、槍のような長い武器を持つた足のない女性がいた。

「貴方は一体？」

「ああ～すまない、私は魅魔だ。普段は魔界に住んでいる者だよろしく頼む」

「魔界だつて!?そんな世界ゲームでしか聞いた事ないぞ!」

「まあ～話すと長くなるから、また機会があつたら聞かせてやる。と

りあえず私に宿るその選手とやらは一体誰なんだ？早くカードを渡してくれ

「あつ・すまない」

サブローは魅魔にカードを手渡した。魅魔に宿つたのは、元神奈川ベーススターズの笹木主浩選手だ。優勝した年には、神奈川の大魔神として日本一に貢献し、後にメジャーにも挑戦した。

「笹木主浩選手か、まさかの大魔神。でもある意味魅魔様にピッタリだね」

「大魔神の守護神…なんだかうやむやするが、なんとか使いこなし
てみせよう」

「絶対的守護神が決まつたか、これはデカイな」

サブローは拳を握りしめ小さくだが「よし！」と言葉を漏らした
「魅魔様が済んだのかい？ならあたいの番だね」

そういうと大きな鎌を持つた赤髪の死神？がこちらに歩いてきた。
「やあ、あんたが四季様の言つてた涌井三郎だな？あたいは小野塚小
町。一応死神だが本業は魂を運ぶ船頭さ」

「死神だつて!?なんとなく君に宿るカードが分かつたよ」

そんなサブローの予感は見事に的中した。小野塚小町に宿つた選
手は、元名古屋ドラゴンズの死神スライダーを操る岩崎仁紀選手だつ
た。

「本来は抑えなんだが、守護神には魅魔様がいるからセツトアッパー
だな」

「なるほど死神繫がりだね、面白そうじやん！よろしくなサブロー」

小町が挨拶を言い終わると同時に突然割り込むように。
「遅れましたー！」

まるで朝寝坊して、急いで教室に来た小学生の如く、慌てたように
右腕全体に包帯を巻いた女性が、息を切らしながら俺の前に来た。
「すいません。ちょっと道に迷つていた子供を助けていて…」

どうやら道中で道に迷つていた子供がいたらしく、その子の道案内
をしていたら約束の時間に遅れたらしい。

「とりあえずサブローさん初めてまして、私は茨木華扇と申します。こ

れでも仙人をしています」

「仙人か、ということはその右腕の包帯にも何か意味でもあるのかい？」

？」

サブローは華扇の右腕の包帯について疑問を投げかけた。

「これは昔修行中に怪我をしてしまって、その時の傷を見られたくて巻いてるんです」

「なるほど～仙人様も大変なんですね、とりあえずカードを渡しますね」

サブローは華扇にカードを手渡した。

「まさかまさかの浅上拓郎選手かよ」

浅上拓郎選手は、元名古屋ドラゴンズのセットアップバーである。最速は157kmを誇り、決め球であるパームボールも魅力である。名古屋の黄金期を支えた選手の一人だ。

「これはセットアップバーまでが豪華になつたな」

「この選手から並々ならぬオーラを感じます。なんとか習得してみせます」

茨木華扇もやる気満々な表情を見せた。

「あう～ん!!」

「ん!?なんだ！」

突如聞こえた謎の鳴き声… 果たしてその鳴き声の正体は一体!?

第5話 集結？魔理沙が連れてきた異変解決メンバー 後編

いきなり山彦のように響き渡る謎の鳴き声。「あうくん」とは何なのか？サブローが考へてはいるといきなり駆け足でこちらに向かって来た二人の人物、一人は緑色の巻き髪に、勇儀とは少し違う角、そして赤いシャツに白い短パン。もう一人は白い髪に犬のような耳、そして剣と盾も持つていて。あと尻尾も生えている。

「やつと着いた… 精霊さん、いくらなんでも嘘の時間を教えるのは酷いですよ」

「本当ですよ、なんで嘘の時間を教えたんですか？」

「いや、勘違いよ、ごめんごめん」

「精霊、この二人は？」

「あ、この二人は緑の方が高麗野あうんで白いのが犬走樺よ」

「色で呼ぶなんて失礼ですよ！」

一人は息を合わせて精霊に怒った。

「とにかく喧嘩だけは勘弁だ。とりあえず二人のカードだ」
あうんと樺にカードを手渡した。

「まず樺に宿つたのは辻彦丸選手、そしてあうんには英岡選手か」

辻彦丸、現埼玉ライオンズの監督である。だが選手としても輝かしい成績を持ち、80年代の埼玉の黄金期を支えた一人でもある。

英岡、現名古屋ドラゴンズの二軍コーチ。選手としては、鉄砲肩に俊足が武器で、幾度となく名古屋のピンチを救つた名選手。

「これまた凄い… というか驚くのも慣れてしまった」

「あと十二人なんだが、この後色々やるみたいだから手短に紹介するぜ」

「そうか分かつた、また個別に聞いておくよ」

「じゃあいくぜ？ 残りの十二人は、レミリア・スカーレット、今泉影狼、藤原妹紅、フランドール・スカーレット、風見幽香、ニツ岩マミゾウ、聖白蓮、魂魄妖夢、東風谷早苗、依神紫苑、永江衣玖、そして博麗靈

夢だぜ！」

「凄い… 全員見た目に個性が… つて靈夢も!?」

サブローがこう言うのも無理はない。明らかにコウモリのような羽を話した小さい女の子に、天女のような羽衣やお坊さん? 明らかに魂が浮いていて、刀を二本装着しているなど目を疑いたくなる。あと靈夢に驚いたのは、最初に出会った時にサブローに伝えてなかつたらである。

「あつ言つてなかつたつけ? 幻想郷ではみんなこれが普通なのよ、あと私もメンバーだからよろしく」

「いや確かに良い奴とは聞いていたけど、なんというか… 言葉がないよ。あとメンバーなら最初会つた時に言つてよ!」

「とりあえず、今は集まつたメンバーにカードを渡す方が先でしょ?」

「ああ、そうだな」

サブローはとりあえず落ちつき、魔理沙が紹介した順にカードを渡していくた。

レミリア・スカーレットにはガルビッシュ優選手

ガルビッシュ優、現メジャーリーガーの投手。日本プロ野球時代は、先発投手ながら防御率1割台、切れ味抜群のライダーだけではなく、キレのあるストレートも魅力の一つでWBCにて世界一の立役者だ。

今泉影狼には元関西タイガースの江典豊選手

江典豊選手、関西タイガースでは不動のサウスパーとして活躍しシーズン401奪三振は世界記録だ。変化球は2種類のカーブとシートだけだが、ノビのあるストレートで打者を寝伏せる。後に宮島などを渡り歩き優勝請負人になる。(今回は関西タイガース時代の能力)

藤原妹紅には元宮島カープの津山恒美選手

津山恒美選手、赤ヘル軍団の抑えを務め宮島の歴代守護神の中でも1番と言つてもいい投手だ。炎のストッパーと呼ばれストレートは、並みいる強打者を三振に仕留めてきた。残念ながら若くしてガンで亡くなつてしまつたが、宮島のファンは忘れないだろう。

フランドール・スカーレットには元宮島カープの金村友憲選手

金村友憲選手、主に関西のイメージが強いが実は宮島カープなんです。宮島時代には若くしてレギュラーを掴み、トリプルスリーを達成するなど打撃のみならず、走塁に関しても並以上の走力を持つ。後に関西にて2000本安打などを達成した。通称アニキ。（能力は宮島カープ時代）

風見幽香には、元神奈川ベイスターズのプルーン選手

プルーン選手、関東色が強いと思うが、実は最初は神奈川ベイスターズなのだ。神奈川時代から抑えとして頭角を現すが、制球力がなく安定に欠けていた。しかし関東に移籍し守護神になると、安定感を身に付け、持ち前のストレートは、当時の日本最速の161kmをマークし、決め球のフォーカーで三振を量産した。ただ血氣盛んなのが痛いところ。（能力は関東時代）

二ツ岩マミゾウには、元宮島カープの山根攻二選手

山根攻二選手、入団から引退まで宮島一筋で愛称は「ミスター赤ヘル」通算本塁打は500本を超える、通算打率も、290しかも広角に打てる高い打撃技術を持っている。とある年のWBCには監督として日本を率いた監督でもある。

聖白蓮には、元札幌ファイターズの小笠村道大選手

小笠村道大選手、現在は名古屋の二軍監督だ。札幌、関東、名古屋を渡り歩いた札幌の侍で愛称「ガツツ」札幌時代には首位打者を獲得するなど札幌の顔となり「札幌の侍」といつしか呼ばれるようになつた。トレードマークは髭。他にも誰もが真似したであろう独特な打法。アベレージだけではなく長打も打つ、チャンスに強い、守備も上手いと非の打ち所のない選手だ。（能力は札幌時代）

魂魄妖夢には、現幕張マリーンズの福田和也選手

福田和也選手、地元の高校から投手としてドラフト最下位でプロ入り。しかし投手では中々結果が出ず一塁手に転向する。すると打撃能力が開花し、首位打者を獲得し翌年には歴代二位のシーズン512塁打を記録。その後は二度の日本一を経験。通算2000安打を達成した幕張の安打製造機だ。

東風谷早苗には、現博多ホークスの内澤聖一選手

内澤聖一選手、神奈川ベイスターズから博多ホークスに移籍した、日本プロ野球史上最高の右打者と言われた時期もあつた。理由は右打者のシーズン打率が、378と、打率の高さ。それだけでもなく右打ちの技術が高く、引っ張りに流しと自在に操る。通算2000安打を達成した。（能力は神奈川ベイスターズ時代）

依神紫苑には、元埼玉ライオンズの西村文也選手

西村文也選手、埼玉では切れ味鋭い二種類のスライダーにチエンジアップ、フォークと多彩な変化球で三振を量産し、最多奪三振を獲得したこともあるエースだ。その一方で不運な投手と言われているのである。理由は過去に2度のノーヒットノーランを逃したのだ、しかも残りアウト1つで…。

永江衣玖には、元幕張マリーンズの古賀雅英選手

古賀雅英選手、幕張マリーンズ一筋の幕張の防波堤。過去には連続試合セーブの日本記録保持者であり、世界大会でもストッパーとして活躍した。武器は150km超えのストレートはもちろん、縦に大きく割れるスライダーに右打者に食い込む高速シューートなどがある。大荒れすることが少なく安定感も抜群である。

博麗霊夢には、元関西タイガースの猪狩慶選手

猪狩慶選手、関西、メジャー、なにわ、独立を渡り歩き今なお現役復帰を目指しているサウスラーである。ある年にはリーグトップの20勝を挙げるなど実力も抜群、変化球は主にチエンジアップが主だが、猪狩のチエンジアップは中々打てない魔球のようだと言わしめるほど。最速は148kmのストレートも魅力である。

残りのメンバーの紹介が終わり、俺たちは団結を高めることにした。

「これで投手十二人、野手が俺を含め十六人全員だ」「異変とやらを解決するまではみんな頑張っていこう！」

「お〜!!」

「んで〜チーム名はどうするのサブローさん？」

「チーム名はもう決めてあるんだ。チーム名は… 幻想郷ドリーム

ズ」

本当はチーム名はすぐに決めたんだが、俺は夢のチームという意味を込めて命名した。

「いいんじゃないかな？」

「いいチーム名ね、じゃあ明後日から幻想郷ドリームズの始動つてことで」

「明後日から？今日からじゃなくて？」

すっかりこれから始めるような雰囲気だつたじやないか、何か理由があるのか？

「今日はさすがに無理よ、道具の準備もあるし、みんなも用事があるのよ？」

確かに俺もグローブも、家に置きっぱなしだし、仕方ないか。

「なるほど、分かつたよ、あと紫様」

「なにかしら？」

「明日その幻想郷に現れたという野球場に連れてつてください！」

やはりどんなグラウンドなのかを確かめたいしな。

「あそこね、確か明日試合があるらしいからいきましようか

「ありがとうございます！ちなみにチームはどこなんですか？また幻想郷のチームですか？」

「いいえ外の世界から来たチームよ」

「外の世界から？チーム名は？」

俺は次の瞬間耳を疑う言葉を聞くことになる。

「確か神戸ブルーウェーブに大阪バファローズつてチームらしいわ、あと明日はないけど、北九州ホークスというチームもあるわ」

神戸ブルーウェーブに大阪バファローズ、そして北九州ホークス…この三チームに関係しているのは合併の際に消えた三チームだつた…でも一体なぜ？

「紫様！その三チームは昔合併により消えたチームです！」

「らしいわね。多分今の世代のファンに忘れ去られてるから幻想入りしたのかもね」

「忘れざられる？」

「あら？ 言つてなかつたかしら？」ここ幻想郷は、外の世界から忘れ去られたものが入つてくる世界なの」

「だからか…」

確かに今の世代には、神戸ブルーウエーブに大阪バファローズを知つてゐるなんて少ないもんな。

「とにかく明日神戸スタジアムに行くわよ」

「それも合併の年に名前が消えて、今になにわバファローズも年間數試合しか使つていない球場だ…」

「とりあえず明日にしましよう。今日はゆつくり休みなさい」「靈夢、貴方も休みなさい」

「分かつたわ、じやあみんな今日はありがとう、解散よ」「じやあね、紫

」

その一言を聞いた全員はそれぞれの家路に向かい帰つていった。

「では明日はよろしくお願ひします。」

「分かつたわ、では明日ね」「あとしばらくはこのマヨヒガに住んでもらうから早く風呂に入つて来なさい」

「了解しました紫様」

「あと私は紫でいいわ」

「はい！」

その後俺は、八雲家の風呂に入り夕食を食べ床にいた。こうして幻想郷に来て初日の今日が終わつた。明日は、何故この幻想郷にいるのか分からぬ神戸ブルーウエーブと大阪バファローズの試合を見に行く、果たしてどんな出来事が待つてゐるのか… そしてどんな選手がいるのか…

第2章 忘れ去られし球団

第6話 衝撃!? 幻想入りしたチームの正体

メンバー発表が終わり一夜明けた今日、何気ない朝。そうだ、今日はようやく紫と共に試合を見に行くんだ。俺は布団から起き上がり、顔を洗い、紫と藍に橙そして俺の四人でちやぶだいを囲んだ。朝食は藍が作ってくれた焼き魚定食を皆で食べている。幻想郷には海が無いらしく、そのためわざわざ川魚を釣りに、藍が妖怪の山?にある川に行くらしい。俺はあんまり川魚を食べたことは無かつたが、この魚は、海にいる魚にも引けをとらない美味しさがある。幻想郷の川は、俺のいた日本とは違う、綺麗な水が流れてるんだろうな。

「どうだ? サブロー殿、お口にあつたかな?」

「いやいや、これほど美味しい魚は産まれて初めて食べたよ!」

そりやそうだ。生臭さもなく、口に入れた瞬間に広がる、香ばしさに塩のしょっぱさ。文句のつけようがない。

「それはよかつた」

「あらうそうなの? 幻想郷では普通に出回ってるわよ?」

「私のいた世界ではこんな美味しい魚は中々に高くて買えないんですよ…」

美味しくて高級な魚は、沢山食してきた。クロマグロに金目鯛、天然ウナギに高級ガニ…だけど比べ物にならないぐらいだ。ただの川魚がこんなにも旨いなんて、俺が生まれ育った田舎を思い出すな。

「外の世界は何かと大変らしいからね」

「橙はどうだ? 美味しいか?」

「はい! 藍しゃまの作ったお魚は美味しいです!」

「ちええええん!!! 私は嬉しいよ!!!」

あれ? 藍って見た目は厳しそうな顔つきしてるので、もしかして、俗に言う親バカの部類なのかな?

「紫、藍つてあんなんのか?」

「橙の前ではいつもあんなんよ… ほんと親バカね」

「まあ、藍らしくていいじゃないですかw」

俺はそんな楽しい会話をしている間に、朝食を食べ終え、洗面台に食器を持つていき、試合を見に行くための身支度を済ませる。

「確か紫の話では、試合開始は朝の10時か、今の時間はつと」

俺は時間を確認すべく、近くにある壁掛け時計を見る。

「!? マジかよ！ 急がないと」

時計が指していた時刻は9時20分、確かにマヨヒガから球場までは、歩いて一時間はかかると靈夢が言つてたな。と、慌てながら事を考へていると。

「準備は出来たかしら？ 早く出発するわよ」

振り向くと、身支度を終えた紫が庭にいた。格好は、昨日見た導師服ではなく、紫のロングスカートに、大きくフリルのついた日傘を持ちながら、こちらを見ていた。

「紫、早く球場に行かないと、試合開始時間に間に合わないぞ」

「大丈夫よ。私の能力を忘れたの？」

「あっ、そつか…」

そうこの八雲紫の能力は「境界操る程度の能力」だから遠い場所でも「スキマ」を使えば簡単に移動できるのだ。

「ではサブローさん、私の出したスキマに入りなさい」

紫の横から、見るからに異世界に繋がっているにしか見えない、怪しい「スキマ」が出現した。

「本当に大丈夫なんだよな？」

「あら？ 信用してないの？」

「ただの確認だよ、じゃあお先に失礼」

俺は紫の言葉を信じ、足早にスキマに入り、球場に向かった。

「じゃあ藍、橙と一緒に留守番と結界の管理を任せたわ、夕方までには戻るからよろしくね」

「はい紫様、お任せ下さい」

「ゆかり様、行つてらつしゃいませ〜」

そう式神達に仕事を言いつけると、紫もスキマに姿を消した。そして俺達は、ここ「神戸スタジアム」に着いた。紫によると俺達の席は、

一塁側の内野席のちょうど真ん中らしく、俺達は席に着き、グラウンドで練習をしている選手を眺めた。

「いや、本物だ。偽物かと思つたけど本当に幻想入りしたんだ…」

「驚くのはまだ早いわよ？外野席を見てみなさい」

そう言われたので外野席に目を映すと、物凄い光景が広がつていた。

「昼間のデーゲームなのに、外野席がレフトにライトのどちらも満席だつて!?」

俺は驚いた。確かにあの当時の神戸は、ナイターでも席はガラ空きで、休日すらも観客は疎らと聞いている。なのに何故だ？

「あの観客達は特殊なの。試合がある日に限つて表れるの、原因は多分だけど」

「多分当時のファンも幻想入りしたんでしょうね…」

そう紫と喋つていると、この球場のDJ（俗に言うウグイス嬢）のアナウンスが、満員で埋め尽くされたスタジアムに響き渡つた。

「只今より、先攻の大阪バファローズ対、後攻の神戸ブルーウエーブの試合を行います！試合に先立ちまして、両チームのスターティングラインナップを発表致します」

「いよいよか、どんな選手がいるのか気になるな」

「先攻の大阪バファローズ」

アナウンスが終わると、電光掲示板にはこう表示せれていた。

「1番センター 大木直之 背番号7」

「2番セカンド 水谷栄二 背番号10」

「3番レフト ルー・ローズ 背番号20」

「4番サード 中村秀紀 背番号5」

「5番ライト 磯川文一 背番号8」

「6番ファースト 吉田タニ 背番号3」

「7番指名打者 川島健史 背番号61」

「8番ショート ショーン・ボルハート 背番号44」

「9番キヤツチャー 的井哲也 背番号2」

「先発ピッチャー 岩見尚紀 背番号48」

「監督 梨味昌孝監督 背番号73」

大阪バファローズのスターティングメンバーが発表され、俺は驚愕した。

「これは大阪のいてまえ打線!?」

いてまえ打線。20×年の大阪バファローズの打線を指す。この年のバファローズは、3番ローズが55本で本塁打王、4番の中村が打点王、5番の磯川が、得点圏打率4割5分と打ちまる。そして6番吉田と7番川島も2桁本塁打と大暴れ。しかし、惜しくも日本一は逃してしまったが、バファローズ史上最強とも言われた打線だ。

「続きまして後攻の神戸ブルーウェーブ!!」

ブルーウェーブのスタメンはこうだ。

「1番ショート 塩味真 背番号31」

「2番セカンド 尾上公一 背番号52」

「3番センター 谷直樹 背番号10」

「4番レフト サー・ブラウン 背番号23」

「5番サード ホース・オーティズ 背番号8」

「6番ファースト 塩川和彦 背番号6」

「7番指名打者 山田武司 背番号5」

「8番ライト 葛城太郎 背番号3」

「9番キヤツチャー 日上剛 背番号47」

「先発ピッチャー 味臺晟 背番号15」

「監督 カー・リー監督 背番号77」

大阪に続き、神戸のスターディングメンバーが、発表された。俺はまた驚愕した。

「こちらは神戸ブルーウェーブの暗黒期のオーダーじゃないか!?」

暗黒期の神戸ブルーウェーブ打線。当時の神戸ブルーウェーブ打線は、あの強打の北九州ホークス打線に、引けをとらない打線であり、チーム打率は3割に近くを記録。3番の谷直樹は打率.350に、4番ブラウン、5番オーティズ、7番山田武司は、2桁ホームランを記録するなど重量打線だ。

「どちらも重量打線であり、投手陣の成績が悪い時代の打線。神戸に

至つては、チーム防御率が過去最低の5割を記録するなど、投手崩壊
が激しかつたらしい」

「でも研究すれば、相手に不足はないわよね？」

「まあそりだが、試合が乱打戦になりそうだ」

「さて試合が始まるわ」

「1回の表、大阪バファローズの攻撃は、1番センター 大木直之 背
番号7」

DJのアナウンスがまた球場に響き渡り、いよいよ注目の試合が始
まった。大阪バファローズは、1番猛牛の核弾頭の大木選手。さて、
1打席目からどんな攻撃をしてくるのか非常に楽しみである。

第7話 神戸ブルーエーブV S 大阪バファローズ

DJのアナウンスを受け左の打席に入るのは、いてまえ打線の核弾頭、大木直之選手だ。するとレフトスタンドのファンと応援団から、大村選手に向けて大きな掛け声をする。

「かつ飛ばせ～かつ飛ばせ～大木!!」

「かつ飛ばせ～かつ飛ばせ～大木～」

掛け声が終わると、選手固有の応援歌を、応援団が吹くトランペットによつて流れだす。

「磨きあげられたその足で～踏み出せ核弾頭～駆け抜けろ速く～勝利への道を～スピード上げて走り出せ～ホームベースを目指して～!!」

「かつ飛ばせ～大木!!神戸を倒せ～お～!!」

「駆け抜けろ速く～～～」

と、このような感じで選手を応援していくのが、日本のプロ野球独自の文化なのである。ちなみに、掛け声のかつ飛ばせ～〇〇の部分は、球団によつて違うのだ。

「スタンドからの凄い威圧感だ～～～ 投手はたまつたもんじやいよな～～～」

「ふむふむ、なるほどね～」

俺の横にいる紫は、応援団に関心を持つたのか、一人でゆつくりと頷いていた。

大木に対するのは左投手の味臺晟。味臺晟が振りかぶつて、キヤツチヤーの構えた所に投げ込む。それにタイミングを合わせ、大村が初球から鋭くバットを振り抜く、すると味臺晟が投げた球は、大木のバットから逃げるようにならぬ變化し、空振りを取つた。

「なんだ!?あのキレのある外に逃げるスライダーは～～～」

「確かにあれは凄そうね」

空振りをした大木は足場を鳴らし再び構え直す。マウンドの味臺晟も、キヤツチヤーとのサイン交換を終え、ゆつくりと振りかぶり投

げた。すると球場に鈍い音が響く。

「バキッ!!」

何か木製の物が折れた音のようだつた。ふと大木のバットに視線を移すと、木製のバットが真つ二つに折れて転がっていた。一方の大木はと、ボテボテのファーストゴロだった。

「多分味臺晟投手、クロスファイアーアーのストレートでねじ伏せたな」「そのクロスファイアーアーってなんなの？」

どうやら紫は聞いたことが無かつたみたいだつた。クロスファイアーとは、左投手が左打者に向かつてインコース、つまり内側に投げ込む投球術のこと。それを捉えようと大木選手が出したバットの根本に、ストレートが食い込みバットに亀裂が入り折れたのだ。

「なるほどね、色んな単語があるのね」

俺は紫に説明してるうちに、球場DJが次の打者のアナウンスをする。

「2番セカンド 水谷栄二 背番号10」

「次はいぶし銀の水谷選手だ」

その水谷は、2ストライク2ボールからの、5球目放られたストレートに詰まり、ショートゴロに終わる。

「さていいよだぞ、いてまえ打線の怖い打者の登場だ」

「3番レフト ルー・ローズ 背番号20」

「ついに来たか… ローズ選手」

ローズは左打席に入るといつもの様に、約1kgはあるプロの木製バットを、顔よりも高くあげ、まるでボールを誘いこむかのようにバットを振る。その様子はまるで巨人だ。

しかし味臺晟はそれにも動じず強気にインコースを速球で押し込む。

「カウントはフルカウント、ここまでローズ選手に対して決め球のスライダーは使っていない、むしろストレートが多い」

「多分次に味臺晟が投げるのはスローカーブね」

「えつ？ 何故分かるんですか？」

「まあ見れば分かるわ」

紫は配球を読んだかの如く、俺に味臺晟が次に投げる球種を教えた。そしてマウンドの味臺晟は振りかぶり投げた。俺は驚いた。：：球筋を見るとスローカーブだった。しかしくらローズでも、あの速球を続けられたあとだ。緩急をつけたスローカーブは打てないだろうと思った、しかし俺は目の前の出来事に驚愕する。

「カーーーーーン!!!」

乾いた打球音が俺の耳に響く。なんとローズは、タイミングを完璧に崩されながらも、自慢のパワーだけでボールを飛ばした。

「ワアーーー!!!」

打球は大きな弧を描き、ブルーウェーブファンで染まるライトスタンドに飛び込んだ。スタンド中段に飛び込む大アーチだ。
「完璧にタイミングはズラされていたのに…」ローズ選手はパワーだけでボールを飛ばしたのか

「ね？言つたでしょ、スローカーブが来るつて」

ローズのホームランもそうだが、紫の配球読みにも驚いた。ただ何故分かったのか？俺はすぐさま紫に問う。

「そりいえば、なんで次にスローカーブを投げると思つたんだ？あそこは決め球の高速スライダーかと思つてたんだが」

「あ～、あれはただの勘よ」

「勘だつて！確かに読み勝負の世界だが素人が読めるなんて…：：紫すごいよ」

「あら？それは褒めてるのかしらね？」

紫は軽く微笑んだ。不敵な笑みに見えたのは気のせいかな？

「4番サード 中村秀紀 背番号5」

注目の中村秀紀は、味臺晟の前に三球三振を喫した。その後中村秀紀にはヒットが無かつた。

「次はブルーウェーブだな、注目はやはり谷直樹選手かな」「私ちよつとお手洗いに行つてくるわ。だからしばらくは、偵察および研究よろしくね」

「ゆつくりでいいぞ、任せといてよ」

紫はそう言うと、球場にあるトイレに向かつて歩いて行つた。そし

てブルーウエーブの攻撃が始まつたが塩味に尾上と、岩見の前に2者連続三振と切られ、次の打者は谷直樹だ。

—谷選手は一体、どんなバッティングを見せてくれるのかな?」

マウンドの岩見は、独特の二段モーションから初球を投げた。球種はストレートで、アウトコースギリギリの所に向かつていく。並の打者なら見送るか、詰まらせての凡打だろう。しかしローズは違った。

またも乾いた打球音が響く。

なんと谷は、類い稀なるバットコントロールで、アウトコースギリギリの速球を完璧に捉え、ファンで埋まるライトスタンドに放り込んだ。

普通あそこをホームランにするなんて難しいぞ……」

「4番レフト サリ・ブラウシ
背番号23」

4番のブラウンは、岩見の前に三振に倒れ、お互いに初回の攻撃を終えた。試合はその後、お互い1対1で迎えた8回の裏に、ブルーウエーブの葛城に、タイムリースリーベースが生まれ勝ち越しに成功し、そのまま神戸が逃げ切った。岩見、味臺晟の両投手は、9回を完投し、試合は神戸の勝利に終わった。

何してるんだろう?」

すると紫が、タイミング良く帰ってきた。

間に」

「たよ」

「ありがとうサブローさん、じゃ帰りましようか?」

「そうだな、紫、今日はありがとう」

「いいのよ、気にしないで。これも異変解決に必要なことだからね」

こうして俺と紫は、神戸対大阪の試合を観戦し、紫のスキマからマヨヒガに帰った。

マヨヒガに移動中…

「ただいま」

「ただいま戻りました。いや、疲れたよ」

「お帰りなさいませ、紫様にサブロー殿」

「お帰りなさいです。紫様、サブローさん！」

マヨヒガに帰ると、藍と橙が迎えてくれた。

「早速藍にデータを渡して頂戴」

俺は紫に言われて藍に今日のデータを渡す。

「確かに受け取つたぞ、明日の朝には出来るから待つていてくれ」

「早いな、藍は仕事が早いよ」

「結界の管理に比べたらこんなこと容易いことさ」

「あ、あとサブローさん？ 明日から練習を開始するわ。場所は人里に

ある、幻想入りしてきた練習場を使うわ」

「なるほど、とにかく今日は休もうかな」

今日の試合は9回に終わつたが、試合時間が4時間30分と長かつたのだ。

「とりあえずサブローさんはお風呂へお入りください、既に湯は沸かしてありますので」

「済まないな藍、ありがとうございます」

俺は今日の疲れを癒すために、藍が用意してくれた風呂に入る。湯船に浸かりながら、明日のことについて考えた。どのように練習するか、どうやって指示をするか、風呂でも考えることがいっぱいだったが、身体の疲れは抜けたようだ。

「さて、明日も早いって言つてたし頑張るか～!!」

「うるさいわよ～」

「あっ…すいません」

ついつい脱衣所で叫んでしまった。さてさて、明日からいいよ幻想郷ドリームズの始動だが、正直不安もあるが、どうにかなるだろうと思ったサブローであつた。

第3章 結成夢のオールスター

第8話 始動！幻想郷ドリームズ

俺が幻想郷に来てから3日目の朝がきた。小鳥が「チュンチュン」と鳴き、気持ちのいい朝を迎えた。俺はそんな小鳥の鳴き声を聞いて、ゆっくりと目覚めた。

「うーん…：幻想郷にきて3日目だけど、こんなに気持ちよく寝れたのはいつ以来だろう」

「おつ、今日も早いなサブロー殿。気持ちよく寝れたかな？」

藍は、俺が寝ている部屋の襖を開けて話しかけてきた。多分俺がまだ寝ていると想い、起こしに来たんだろう。

「ああ、久々だよ、こんなに気持ちの良い朝を迎えたのは」

「それはよかつた。布団は片付けておくから、サブロー殿は先に朝食を食べてくれ、もう紫様と橙がいるはずだ。あと研究データなんだが、もう少し分析したいことがあるから、まだ待つてくれないか？」

「分かったよ、ありがとう藍」

俺は藍に礼を言つて、紫と橙が朝食を食べている茶の間に向かった。

「おはようござります、紫に橙」

茶の間の襖を開け、朝の挨拶を交わす。

「あらーおはようサブローさん、遅いから先に食べちゃったわよ」「おはようござります、サブローさん」

既に紫と橙は、朝食を済ませていた。とりあえず俺も朝食を済ませ、洗面台に行き手を洗い、歯を磨いた。

「ふう、今日の朝食も美味しかったな。なんか今日からの練習、頑張れる気がするぞ」

すると茶の間から紫の声が聞こえた。

「サブローさん、準備が出来たなら出発するわよ」

どうやら俺の準備待ちらしい、急がなければ。俺は紫が用意してくれた、野球の練習着に着替えて、紫と藍と共にマヨヒガをあとにして

練習場に向かつた。

「少女移動中」

「到着したわよ、ここが私達の練習場よ」

「いやいや待て待て……ここが俺達が使う練習場!？」

俺は驚いた。何故なら、紫が練習場と言つて案内したのは、地方球場に室内練習場と、想像以上に豪華すぎる設備だ。

「地方球場に室内練習場だつて!? 俺は総合練習場みたいな、4面ぐらいある広い所かと思つてたよ」

「やっぱり球団を持つなら、いい環境でやりたいでしょ?」

「それはそうだけど、まさか室内練習場までとは……」

「あつ、室内練習場なんだけど、主に投手陣のブルペンになるわ」

「なるほどつまり投手陣専用つてことか。でもチームの捕手つて、藍と永琳先生だけだろ? バッテリーは組めても2組だけだし、他はどうするんだ?」

ブルペン捕手というのは、投手の投げる球をひたすら受け続ける捕手のこと、プロ野球やメジャーリーグでも、ブルペン捕手として活躍してゐる方は沢山いる。

「そのことに関しては考えてあるわ、あと少ししたら、メンバー全員と一緒にここに来るわ」

「まあ策があるなら大丈夫なんだが」

俺は、紫には考えがあるんだと少々不安ながら頷いた。そんな話をしていると、向こうからメンバーが来たみたいだ。

「少女集合中」

「皆さんおはようございます。今日から幻想郷ドリームズが始動します、あと練習も今日から開始なので、頑張っていきましょう!」「よろしくお願ひします!」

俺は全員に、今日から幻想郷ドリームズが始動と宣言するあいさつも済ませた。するとまた向こうから誰かが来たみたいだ、よく見ると、顔を覆つてゐる被り物には「罪」と書かれてゐる。

「まさか紫、あれがか?」

「ええそようよ」

「なんか怖いんだが…」

「あれは罪袋って言つて、人里に住んでいる一般人よ」

「はあ…なるほど」

そして罪袋達が到着した、ざつと五十人位はいるみたいだ。すると紫は俺にこう説明した。

「この罪袋達には、異変が解決するまではブルペン捕手のみならず、グラウンド整備に打撃投手などの裏方をしてもらいます」

「ふむふむ、では罪袋さん。異変解決までよろしくお願ひします」

「任せなあんちゃん！」

「紫様のためだからな！」

「やつたるで～！」

罪袋達は気合いが入りまくつてゐるみたいで、それぞれが喜びを叫んだ。

「でも紫、ブルペン捕手を担当する罪袋は大丈夫なのか？ドリームズ投手陣の平均球速は150km前半だぞ？」

「あ～それなら大丈夫よ、捕手に必要な能力は、それぞれに与えてるから心配は要らないわ」

「紫つて凄いな…」

俺は小声で、改めて紫の凄さを体感した。

「そうだ紫、皆ユニフォームがないんだがどうするんだ？」

「ユニフォームはあるわよ、藍、みんなに配つて頂戴」

「はい紫様」

紫に言われ、藍は手元にあるユニフォームを、皆に手渡していった。

「凄い！サイズがピッタリだし着やすいし動きやすい！」

「やっぱりアリスは頼りになるわね～」

「アリス？衣装屋かなんかかい？」

「アリス・マーガトロイド。魔法使いで、人形や衣装を製作してるの」

「そうなのか…あとこのユニフォームなんだが、デザインも決めてたのか？」

「デザインは赤を基調として、黄色や黒があるわ。あとは人数分のヘルメットにバット、バイク、グローブに大量のボールとかも用意し

「たわ」

「・・・」

俺は言葉が出なかつた。

「あとグローブなんだけど、個人のイメージカラーにしておいたから、
単色とは限らないわよ」

「俺は黒と白・・・幕張マリーンズカラーだな」

「じゃあ今から皆、球場の中にある更衣室でユニフォームに着替えて
きて頂戴。あと罪袋達は室内練習場でお願いね」

紫の言葉を聞いて、それぞれ更衣室に向かつて行つた。

～少女＆罪袋着替え中～

「皆似合うじゃないか！」

「そうかな～？あと凄く動きやすいのぜ」

「とりあえず早く始めましょーか」

「そうだな、じゃあ投手陣は俺が投げ方とか色々教えるよ。野手陣は
紫に任せるとよ」

俺と紫は話し合い、初日と二日目の指導担当を決めた。

「そして明日は、逆になるのね？」

「そういうことだ、じゃあ皆、今日一日頑張つていこーう！」

俺の開始の合図とともに、投手陣と野手陣は、室内練習場と地方球
場に分かれてそれぞれ練習を開始した。

第9話 前途多難な投手陣

「とりあえず最初は、ブルペンのある室内練習場に行くか」
紫と別れたサブローは、投手陣とブルペン捕手となる罪袋を引き連れ、室内練習場に向かつた。

「とりあえず最初はストレッチから始めよう、まずは二人一組になつてくれ」

俺が声をかけると、皆は二人一組を作つた。靈夢と魔理沙ペア、影狼と妹紅ペア、幽香と鈴仙ペア、衣玖と華仙ペア、レミリアと魅魔ペア、小町と紫苑ペア。

「よーしペアを作つたな、じゃあまずは一人が開脚で座つて、もう一人が軽く背中を押してくれ、じゃあはじめ！」

「いたいた！ちょっと魔理沙優しくしてよね！痛いんだから！」

「なーに言つてるんだ博麗の巫女が、ほらほら、まだまだいくぜ！」

「だから痛いつてばう!!!!」

俺は内心こう思つていた。（こりや先が思いやられるな…）グダグダだつたが、なんとかストレッチを終え、俺は次の指示を出した。

「よし、皆大丈夫みたいだね。じゃあ次は軽く五分間のランニングやるから二列のを作つて」

「サブローさんや、あたいはバスじやだめかな？」

そう言つたのは、赤髪の死神である小野塚小町。紫によれば、重度のサボリ魔らしい。

「ダメだ小町、しつかりしないと怪我をするスポーツだから、やらないといけないぞ。

俺も走るから大丈夫だ、走つてれば五分なんてあつという間さ」「仕方ないな、分かつたやるよ」

小町は渋々納得したみたいだ。サブローの先導のもと皆は、室内練習場で五分間ランニングした、掛け声は止めておいた。

「3…2…1…」はい終了！皆お疲れ、次はキヤツチボールだからスパイクに履き替えてくれ、グローブもはめてね

だが皆は疲れていた。すでに息が上がる者もいるが、大丈夫の者も

いた。

「疲れた～、姉さんからもらつたおにぎりを食べてからやらないと、力が出ない…」

紫苑にいたつては、ランニング後におにぎりなんて・・・このあと吐かないかな？」

「普段は飛んでるから、こんな少し走つただけで息が上がるなんて…：今後は少し歩くようにしようつと」

「だらしないな～靈夢、私なんてまだ全然大丈夫だぜ？」

メンバーのほとんどは、普段は飛んで移動してるらしいから、あまり走りなれてないのだろう。その後、皆はスパイクを履き、グローブをはめて、キヤツチボールの隊形を作った。

「あとからピッティングをするから、軽く放る程度で大丈夫だからね」すると隣にいる鈴仙と魅魔が、ある疑問について喋り合っていた。「初めて野球のボールを触りましたが、なんだか滑り易いですね？」「だが紫によれば、こんなボールでも、投げれば力強い球になるのだろう？しかも変化するのだから驚きだ」

とまあそんなこんなで、みんな不慣れではあるがキヤツチボールを終えいやよいブルペン入りになる。

「一人一人に罪袋さんがつくから、好きな場所についてくれ」

ブルペンは十二個。外の世界のプロ野球の施設でも、十二個なんてまずない。紫は、河童である河城にとりに頼んで改造も施してもらつたらしいが、これは目を疑うよ。

「あと皆の足元にロジンを置いたから、自由に使つてくれ」

すると影狼から質問が飛んできた。

「サブローさん、この白くて手のひらサイズの袋がろじん？なんですか？一体なんの効果があるの？」

そつか、ロジンと言つても皆初めて見るから分からないよな。よし、一から説明するか、と次の瞬間。

「多分触つた感じからして滑り止めじやないですかね？」

衣玖さんが答えてくれたが、なんで分かつたんだろう？とりあえず進めるか。

「そう、衣玖さんの言うとおり、このロジンと言う白い粉ができる袋は、
滑り止めなんだ」

「いつ使えばいいんだい？」

「それは自由だよ。基本的には、雨が降つてボールが濡れて滑りやすくなるからロジンをつける、あとは、コントロールミスが出来ない重要な場面とかで必要になるぐらいかな？」

「これ食べれるかな？」

「紫苑ダメだよ！ それは食べれないからね！」

「そりゃなんだ、忘れないようにしなきや」

ロジンは何気ないけど結構大事な物なのである。そしてピッチング練習が始まった。皆スペルカードの影響で、フォームは最初から出来るようになつて、あとは変化球の操り方とかかな？ いくらスペルカードがあるからと言つて、個々の技術が必要になる。

「スバーン!!!!」

「ズバーン!!!!」

「ズバーン!!!!」

いきなりブルペンに響き渡る物凄いミットの音、しかも3つも。音の主はレミリア（ガルビツシユ優）魅魔（笛木主浩）幽香（ブルーン）どれも球速150後半～160km前半。

「こんな感じかしらね～」

「私のようなカリスマにかかれば、こんなもの造作もないわ」

「なるほど… こんな感じなのか」

いやいや、いきなり150オーバー投げといて反応薄つ!? 次元が違
いすぎる…

「これは負けてられないわね」

「ですね、私達も張りきらなくちゃ」

なんだか良い刺激剤になつたみたいだなこれは… その後、みんな必死になつて投げ込みをした。もちろん変化球の投げ方も教えながら、そして俺はこう切り出した。

「そろそろかな… よーし一人ずつ俺が打席に立つて球筋を見る。ま
ずは靈夢から」

「はいはーい、分かったわよ」

靈夢はサブローに言われて、嫌々マウンドに立つ。

「とりあえず投げるわよ、しつかり見極めなさいよ

「OK、全力で放つてきな！」

第10話 魅せる決め球

「いくわよ～夢想封印！」

そう宣言すると靈夢は、ゆっくりと右足をあげ、ゆつたりとしたフォームから右足を踏み出し、左腕を思いつきり振り抜いた。白いボールは変化しながら、向かってきた。

「これはサークルチェンジか」

「バシーン！」

靈夢から放たれたボールは、ストライクゾーンを通過し、音をたてながらキヤツチャーミットにおさまった。

（球速は100～110前半つてところかな、よしあれをしてみるか）
「よーし変更だ」

「何が変更なの？ いきなり」

突然のことに驚いた靈夢をしり目に、サブローは近くに置いてあつたカバンから、ある物を取り出した。そして唐突な変更の意味を説明した。

「悪いな、いきなり変更とか言い出して、これを使って君達を試そようと思つてね」

そう言つておもむろに取り出したのは、何の変哲のないバットのグリップ部分だつた。

「これは、紫がにとりに作つてもらつた発明品で、その名もセンサーバットだ」

「おいおい、なんだそのせんさーばつとつて？」

あまりにも不思議すぎて、魔理沙はたまらずサブローに問いかける。

「簡単に説明するとだな、このグリップの中心内部にセンサーがあつて、これを素振りの要領で振ると、内蔵されてるセンサーがボールに反応して、そこからバットのどの部分に当たつたかを分析してくれるんだ」

「なるほど～、つまりお前の狙いは、一打席勝負つて訳か？」

「その通りだ妹紅。さあ靈夢、勝負をしようか」

「了解、絶対抑えるんだから」

俺と靈夢は、再び所定の位置につき、真剣一打席勝負が始まった。靈夢はもう一度振りかぶり、ゆつたりしたフォームから、右足を踏み出し投げる。

「はあああああ！」

勢いのある声とともに放たれたボールは、変化はせず、高めに真つすぐ向かってきた。どうやら靈夢は、初球にストレートを選んだようだ。

「コースはインハイか、しかしこれは高い、ボールだ」

俺は確信を持つて初球を見逃した。ボールはインハイを通過し、キャッチャーミットの中に収まつた。

「ストライク！」

キャッチャーの罪袋は、ストライクコールをした。そんなはずはないと俺は罪袋に確認した。

「今のはボールじゃないか？高いし」

「いや、今のはコースいっぱいのストライクやあんちやん」「なんだつて!?」

嘘だろ・・・選球眼だけは自信があつたのに、やっぱり衰えてるのか？

「あらう？どうしたのかしら、元プロさん？」

目を丸くして俺を挑発するような、靈夢の一言が聞こえてきた。多分だが、今ので勝てる自信がついたのだろう。

「まだまだ今からさ」

左打席に入り、息を整え、再度構えなおす。それから両者接戦で、カウントは2ボール2ストライクになり、サブローは追い込まれていた、そして。

「これで勝負ありよ！」

その言葉とともに、靈夢は渾身の一球を投げ込む。アウトローに沈み込む、ウイニングショット「夢想封印」だ。だがサブローはこれを待っていた。

「来たな、ずっと待つてたんだよ、この球をね！」

俺は右足を踏み込み、センサーバットを振り抜く。結果は… 空振り。つまりボールに当ることが出来なかつた。

「やつたー！私の勝ちね」

靈夢はマウンドの上で、喜びを爆発させていた。一方のサブローは、（なんだ、あのブレーキの効いたサークルエンジは… プロの世界でも見たことがないぞ）内心俺は、更に焦つた。（これはやばいことになりそうだ）だけど切り替えないと。

「次は… 魔理沙だ」

俺はとにかく考えるのを後にして、とりあえず球種を見極めることにした。だが魔理沙は靈夢と違い、遅いストレートで二球連続ストライクをとり、あつという間に2ストライクになつた。

（魔理沙はまだ変化球を使つてこない… なんかありそうだ）

「いくぜー！マスタースパーク！」

魔理沙の放つたマスタースパークは、俺が振りぬいたセンサーバットにかすらず通過した。（球速は156km!? しかもめちゃくちゃ伸びてきた）

「どうだ？ この魔理沙様のマスタースパークは？ 打てないだろ？」

ニヤニヤしながら、魔理沙は俺を見ながら言つてきた。

「完敗だよ魔理沙。それじゃあ次は…」

こうして俺は、レミリアや妹紅など残り十名を順に見ていき、その後100球の投げ込みをさせて、今日の練習は終了した。

「はーい皆お疲れ様。多分もう少ししたら紫のグループも終わるから、暫く待つてくれ」

しばらくして、紫と野手陣が戻ってきた。皆全身泥だらけだつた。

「皆いるわね、今日はお疲れ様。また明日同じ時間から練習だから、遅刻しちゃダメよ？」

「紫の言つた事も大事だが、とにかくもう夕方だから、今日はしつかりと休んでくれ」

「はーい！」

皆疲れた声で返事をした。やはり初日からハード過ぎたかな？ だが投手陣は比較的軽めだったはずだが… 野手陣は一体どんな練習

をしてたんだ?

「紫、野手陣はどんな練習をしたんだ? 投手陣よりも疲れてなかつたか?」

その原因はすぐに判明した。

「簡単なランニングに、バッティングと守備練習。あとは走塁にノック、そして最後に三十分間走よ?」

「いやいやいや、流石に初日でその練習量はやりすぎるよ」

「紫……初日からそれは厳しすぎるよ」

「あら? そうかしら? 皆妖怪だから壊れはしないわよ」

「でもダメだ! 明日は投手陣を見るんだから、しつかりしてよね?」

「分かつたわよ。気をつけるわ」

サブローは厳しすぎる野手陣のメニューに対し、紫に一喝を入れ、紫のスキマで藍と共にマヨヒガに帰った。

「おかえりなさいませ! ゆかりさま、らんしゃま、サブローさん! マヨヒガに帰ると橙が笑顔で迎えてくれた。そしてすぐさま藍に飛びついた。

「らんしゃまー! ちえんはちゃんとおるすばんできましたよー」

「ああああああああああ! ちえええええええええん! 一人でお留守番出来たなんて、とても偉いぞー!!!!」

「偉いなく橙は、あと藍の溺愛も相変わらずだな w」

「藍? あんまり恥ずかしい姿をサブローさんにみせないでよね?」

「大丈夫だよ紫、俺は構いませんし w」

俺は半分羨ましさもあつたが、とりあえず笑つておいた。先にお風呂を済ませ、居候させてもらつての寝室にいき、今日靈夢達が投げた決め球の特徴を、藍からもらつた冊子に、一言一句書き留めた。

「よーし、これを明日紫に渡して、投手陣のレベルアップに活かしてもらおう」

すると藍が寝室の襖を開け「サブロー殿、夕食の準備が出来たぞ」と、どうやら夕食の準備が出来たことを伝えに来てくれたらしい。

「分かつたよ藍。今一緒行くよ」

俺は冊子を置き、茶の間に行き、四人での夕食を済ませて、庭で藍

と一緒に素振した。

「ブン、ブン、ブン…」

「ブン、ブン、ブン…」

静かなマヨヒガの庭に、バットが空を切る音が二つ。そんな音の中、藍と俺は今日を振り返った。

「藍、野手陣の練習だけど、大丈夫だつたかい？」

「大丈夫さ、と言いたいが、流石の私や勇儀でも疲れたよ…」

やつぱり案の定つてところだな。

「明日は俺が見るけど、今日みたいな厳しくするつもりはないから安心してくれ」

「ははは、分かつたよサブロー殿」

「じゃあ今日は250回振つたら終わろうか」

「うむ、そうするか。あつ、シャワーの準備は橙に頼んであるから、好きな時に入つてくれ、私はあとから浴びるよ」

「ありがとう藍」

俺は先に素振りを250回終え、藍に先に浴びると伝えシャワーを浴びた。その後軽くストレッチをして、紫が森近霖之助さんから貰つてきた、男性用の寝巻きを着て布団に入つた。

「さあ、明日はどうなることやら」

そんなことを考えながら、疲れた体を休めるために、今日は早めに眠りについた。

第11話 マヨヒガでの騒ぎ

「にやあああああああああああ！」

「うわあ！なんだなんだ？」

まるで断末魔のよくな叫び声が、朝のマヨヒガに響き渡る。もちろん俺も驚いて目を覚ました。

「声の正体は橙か、一体何があつたんだ？」

俺は首を傾げながらも、足早に声のした台所に向かつた。するとそこには割烹着姿の藍と橙、そして何故か床に落ちている焼き魚。

「橙、一体どうしたんだ？」

「あつ、どうやら起こしてしまつたようだな」

「まあ俺は大丈夫なんだが、それより橙は？」

「ああ、橙のことなんだがこの通りなんだ」

「ふえええん… らんしゃまごめんなさい…」

「実はこうなつたのには訳があるんだ」

藍から事情を聞いたところ、朝早くから藍は、朝食の魚を焼いていたらしいのだが、橙が俺のために魚を焼きたいと言い出したため、藍の付き添いのもと魚を焼いていた。そして盛り付ける際に、どうやら菜箸を使わずに直接手でやろうとしたらしく火傷をしたらしい。だから焼き魚が床に落ちてるらしい。

「なるほど… んまあ俺は大丈夫だ」

「サブローさんごめんなさい…」

「大丈夫だよ橙」

「すまないなサブロー殿。今すぐ新しいのを作り直すから暫く待つていてくれ、ほら、橙はサブロー殿と一緒に居間に待つていなさい」「はい、らんしゃま…」

「泣かなくてもいいよ、さあいこうか」

俺は橙を連れて、茶の間に向かつた。そこにはいつ来たのか紫が座つていた。

「あら～？ そつちは解決したの？」

「こつちはなんとかなつたみたいだ」

「ゆかりさま… 朝から騒いでしまってごめんなさい」

橙は座つていた紫に、騒ぎを起こしてしまったことを謝つた。

「大丈夫よ、さあとにかく一人とも座りなさい」

「ほら橙、紫も許してくれるから一緒に食べてようか」

「はい、サブローさん」

すると台所から、藍が焼き魚を持つてやつてきた。焼き魚はとても香ばしくて良い匂いだ、瞬く間に居間全体に広まつた。

「お待たせして悪かつたなサブロー殿、すまないが前失礼するぞ」

藍は俺の前に焼きたての焼き魚を置いたあとに、割烹着を脱いで自分の位置に座つた。

「じゃあみんな自分の前に料理はあるわね？じゃあいただきましょうか」

「はい！ ゆかりさま」

「そうしますようか」

「ではみんなで…」

「いただきます！」

（朝からとんだハプニングがあつて焦つたが、なんとか丸く収まつて橙も落ち着いたみたいだし、よかつたよかつた）

「そうだサブローさん」

「ん？ どうした紫？」

「異変解決のための試合の件だけど、初戦は大阪バファローズで試合は明後日ね」

「はい!?」

「いつ決まつたんですか紫様！」

紫の一言に、俺と藍は驚いて声をあげた。

「今日の朝決まつたのよ、急にね」

「はへ？」

「今日の朝早くに、大阪バファローズの監督さんが靈夢とともにマヨヒガにきて、明後日試合をやりましようつて直で言いに来たのよ」

「だけど流石に早すぎるよ、だつてまだ全体練習もしていないのに…」

「だから明日するのよ」

「はあ・： 紫様は本当に困った人です」

「ははは、まあでもやつてみるし、今日の練習でも皆に話しておくれよ
なんと明後日のいきなり試合に驚きを隠せないサブローと藍、果た
して明後日までにどうにかできるのだろうか。

第12話 紅美鈴の苦悩

マヨヒガでのドタバタを終え、食事も済ませた俺達はスキマで、練習場のあるグラウンドに向かつた。

「いや、まさか朝からドタバタするなんてねw」

「本当にすまない、寝ているところを起こしてしまい」

「大丈夫だよwもう気にしてないから」

藍はよほど気にしていたらしく、とても申し訳ないと頭を下げ続けたが、俺が大丈夫だよと言うと納得したみたいだ。

「ほら、そんなことしてる間に着いたわよ」

「ありがとうございます紫様」

「さあ藍、急いで着替えて練習しようか!」

「そうだなサブロー殿」

三人はスキマから出ると紫は室内練習場、俺と藍はグラウンドに向かつた。

「男子更衣室」

「ふう、とりあえず今日はランニングしてから、ストレッチして…」

俺は、今日の練習メニューを確認しながら着替えていると急に

「バーン!!」と扉が開いた。

「なんだ!?」

俺はすぐさまドアの方を振り向くと、そこには、紅魔館の門番でチームの一墨手である紅美鈴が、ユニフォーム姿で立っていた。

「サブローさん! ちょっと相談にのつて貰えませんか?」

「あの、美鈴、俺まだ着替え中なんだよね…だから話はグラウンドでね?」

「あーすいません!! ではグラウンドで待ってます!」

そう言うと美鈴はドアを閉めた。

「とにかく美鈴が困ってるみたいだし、早く着替えよう

俺はとりあえず何事もなかつたかのように着替え始めた。

「少女着替え中」

「とにかく、メニューの確認もしたし、そろそろグラウンドに行くか」

「～移動中～」

「遅いぞ～サブローー！」

「まつたく待たせすぎよ」

グラウンドに行くと、みんなが待つていてくれていた。

「いやいやすまない、ちょっとメニューの確認をしてたら遅れてしまつてね、あと美鈴が来たからちよつとね」

「あやや～？ 本当ですかね～？」

「なんだよ文」

遅れた理由を話していると、横から文が割って入つて來た。

「本当はナイスバディな美鈴さんと、その時に何かいやらしいことしてたんじゃないんですか？」

「変なこと言うなよ！ そんなことないわ！」

「そうですよ！ 現に私は一番乗りでグラウンドに居たじゃないですか！」

文のデータラメを否定するため、俺と美鈴は文に向かつて反論していた。

「天狗～？ 練習が終わつたら夜雀庵で飲もうな？」

「はひ～！ それだけは勘弁してください勇儀さん～！」

(そういえば天狗は鬼に頭があがらなかつたんだつたな、ありがとうございます 勇儀さん)

「んじゃとりあえずまずは軽く足首、膝を屈指体操したら、五分間のランニングから始めようか」

「はーい！」 「了解～！」 「やるか～！」

それぞれが軽めのストレッチを終え、五分間ランニングへと向かつたが、俺は美鈴を呼び止めた。

「あっ、美鈴」

「はいサブローさん」

「さつきの話を聞くからベンチで話そつか」

「分かりましたけど練習は？」

「悩んだ状態でやつても悪影響だろ？ だからまずは練習よりも、話をするのが先決さ」

「分かりました」

「藍～！しばらくは君がリーダーをやつてくれ～！メニューはベンチにあるからまた取りに来てくれ～！」

「了解だサブロー殿！」

藍にしばらくリーダーを任せて、俺は美鈴と共にベンチに向かった。

「移動中」

ベンチに座った俺は隣に座っている美鈴に話かけた。

「それで美鈴、俺に相談つて言うのは？」

「実は…ドリームズには私と同じポジションが一緒な樋さんがいるじゃないですか」

「うん、いるな」

「樋さんって私と違つて選球眼があつて、打撃、走塁、守備が上手いじゃないですか…昨日なんか私ミスばっかりしてしまつて、だからレギュラーになれるか不安で」

実は美鈴昨日の紫の練習で、バッティングではヒット性の当たりはないし、ノックでもエラーが多くつたりと散々だつたらしい。対する樋は完璧にこなしていたとのこと。

「なるほどな～でも俺も同じだよ？」

「えつ、でもサブローサンはその道のプロなんですよね？」

「元だけどね」

「でも俺は美鈴がレギュラーになれる可能性があると思うな～」「なんでそういう思うんですか？」

「俺は外野手だけど、パワーなら勇儀にひけをとらないフラン、足なら幻想郷最速の文、守備なら外野一のあうん、安定感は抜群のマミゾウ、勝負強さはピカイチの早苗…ある意味レギュラーが危ういのは俺だつて一緒さ」

「でも…」

不安な顔をした美鈴にこう言つた。

「練習なら今から俺が付きつきりで練習を見てやる」

「ありがたいのですが、それでは他の方々は」

「ああ、付きつきりと言つてもずつとじやないから大丈夫だよ」

「… 分かりましたサブローさん」

「よし、分かつたのなら軽くランニングしてみんなと合流してこい」

「はい！」

美鈴は迷いが吹つ切れたみたいで、足早にみんなのところに合流した。

「十本しこう」

「アーティスト集」

俺はアップを終えた野手陣を集めさせて、次のメニューを伝えた。
「次はバッティングをしてもらう。罪袋達が既に二つセットしてくれたから一人三十球、あとその後ろでティーバッティングを五ヶ所で、あとは素振りをしてくれ、それを順番に回していく」

『二二七』曰、これは「口裏環」でハシニシノ練習は何れる。

テイリハツティング 一人がホールをタイミングよく下から投げて、それをもう一人があらかじめ設置してあるネットに打つ練習である。

「サア、口によ
順番はどうするんだい？」

「そうですよ 誰からやるんですか？」

勇健と秀瑞が十二回に質問した

は
」

俺はみんなに指示を出して なんとかみんな持ち場に一いた

よしそれじゃあ始め！ 罪袋さんよろしくお願ひします！」

罪袋の元気な挨拶がスタートの合図となり、練習が開始された。俺はもちろん美鈴にマンツーマンで教えつつ、勇儀達のバッティングを見守る。すると最初から快音が響く。

物凄い打球は、虹のような放物線を描きスタンドに入った。

「やつぱり凄いな～勇儀のパワーは、聖の広角に打てる打撃も魅力的だ」

「そうですよね、やはり勇儀さんに聖さんも私と違つてパワーがあるて、それにアピールポイントがあるのも羨ましいな～…はあ…」

溜め息混じりに美鈴の本音がこぼれた。

（そうとう昨日のことを引きづつてゐたいだな、なんとかしないと
「よし美鈴、こつちも始めるか！」）

「はい！お願ひします！」

「いくぞ、1、2、3！」

俺はいち、にの、さんのタイミングで下からボールを放つた。

「ふん！」

「カン！」

美鈴はバットの先で捉えたため、小さめの乾いた音が鳴つた。
「美鈴、これはしつかりとタイミングをとつて打てばいいからね、よく

ボールを見て芯で捉えてみよう」

「はい！分かりました！」

「それじゃいくぞ、1、2、3…」

それから俺は美鈴と共にティーバッティングをしつつ、バッティングフォームの方も指導していくつた。まったく、四番候補の一人のフランや俊足好打の天狗コンビ、流し打ち中心の妖夢に咲夜と、クセのある打者だから指導には苦労するよ。そしてついに最後の打者、美鈴と小傘だ。

「藍は小傘を見て欲しい、俺は美鈴を見るから」

「了解したサブロー殿」

俺は藍に小傘のバッティング指導をお願いして、付きつきりで美鈴を指導する。

「では行きますよ～？」

罪袋は準備が出来たと聞いてきたので。

「よろしくお願ひします」

俺は準備が出来てると答えた。そしてフリーバッティングが始

まつた。

「カーーーン！」

「カン！」

乾いた音が二つ響いたが明らかに音が違う。打球を見ると、小傘は左中間へのライナーを打っていたが、美鈴はボテボテのショートゴロだつた。

「よし、小傘その調子だ」

「はっはい！」

藍に褒められた小傘は嬉しそうだつたが、美鈴は少しばかり残念そうだつた。彼女からしたらいいスイングをしていたが、打球はまつたくだつた。

「美鈴。ヒットを打つことをイメージするのも大事だけど、まずは芯で捉えることを意識してごらん？ テイーのように」

「はい！」

しかしその後、美鈴からは快音が聞かれずフリー・バッティングを終えた。そしてその後ノックのため、俺と美鈴達はそれぞれのポジションについた。

「まずは内野からいきまーす！」

「おーし!!!」

みんなの掛け声のもとノックがスタートした。

「カーン！」

「パシッ！」

「シユツ！」

「ナイスキヤッチ！」

(よしよし、サードの聖と小傘、ショートの咲夜と寅丸も問題ないな)

（そう思つていた矢先のことだつた。

「次、紅美鈴お願ひします！」

「カーン！」

(打球はショートバウンド。これは落ち着いて処理してつと…えつ…)

美鈴は落ち着いてショートバウンドを処理しようとした時だ。

(なつ！バウンドが変わつて顔に！)

「痛つ！！」

「バタつ・・・」

美鈴は「痛つ！」という言葉を発して、仰向けに倒れてしまった。

「美鈴！」「美鈴さん？」「中国門番！」

一瞬にしてグラウンドが凍りついた。

「： 永琳先生！急いで美鈴を救護室に！あと担架を！」

俺は慌てず担架を要求した。

「鈴仙、救護室に担架があるから持つてきて頂戴！」

「はい！師匠！」

鈴仙はそう言うと駆け足で救護室に担架をとりにいった。永琳先生は美鈴のところにきて、今の身体状態を調べた。

「美鈴？私よ大丈夫？」

「はい・・・なんとか大丈夫みたいです・・・」

「美鈴！動くなよ、今担架で救護室に運ぶからな」

すると永琳先生が俺にこう伝えた。

「多分だけど、軽い脳震とうだと思うわ」

「軽い脳震どうか・・・」

「師匠！持つてきました！」

鈴仙が担架を持ってきたので、俺は慌てず、鈴仙と一緒に美鈴を持ち上げて担架に乗せた。

「とりあえず美鈴の処置は任せてくれ、みんなは藍の指示のもと、練習を再開してくれ」

「お、おう・・・」

「よし、みんなポジションに戻つてくれ、再開するぞ」

藍は俺の指示通りノックを再開した。

「鈴仙いくぞ」

「はい、いきますよ」

「1、2の3！」

「慎重に運ばないと脳にダメージがいくからな」

「それじやあ救護室に行くわよ」

俺と鈴仙、
永琳先生と美鈴は救護室に向かつた。

第13話 交わされた約束

「急いで、状況は一刻を争うわ」

「永琳先生。美鈴は大丈夫なんですか？」

「まだ分からないわ。詳しく見てみないと」

慌ただしい足音と言葉が交わされる球場内の通路、それほど美鈴の容態が良くないことを示していた。美鈴自身の意識はあるが、顔は痛みを我慢していたのか、しばし歯を食いしばっていた。

「さあ着いたわよ、うどんげにサブローさん。慎重に美鈴をベッドに寝かせてちょうどいい」

流石は医者の永琳先生、冷静沈着で適切な指示だ。しかし関心してる場合じやない、今は美鈴の方が大事だ。

「サブローさん、1、2の3で担架からベッドへゆっくり移動させますよ」

「よし分かつた」

「1、2の3！」

無事に美鈴をベッドに移したのを見て、すかさず永琳先生は再度美鈴を詳しく診察し始めた。脈拍に血圧測定、血液採取など脳震とうだけでなく、あらゆる可能性を考えている。

「顔は少し白い気がする… 血圧も妖怪にしては低いし」

「師匠、美鈴さんの容態は？」

永琳先生の表情は少し曇っていた。やはり重い症状なのか？数秒おいて永琳先生が口を開いた。

「美鈴さんは大丈夫よ。血圧こそ低いけど軽い脳震とうよ。ただ右脚が少し痺れてるみたいね、妖怪だから2、3日で完全に回復するけど、これじや試合には間に合わないし出場するのは難しいわ」

美鈴は一命を取り留めたが、代償として右脚が一時的に麻痺してしまった。なんとかして美鈴を出せないかと永琳に提案したが、永琳は症状を悪くするだけとドクターストップをかけられた。

「サブローさんゴメンなさい。また私へマしちやつたみたいです、迷惑ばつかりかけちやつて」

美鈴は俺に迷惑かけてすいませんと、涙を目に溜め声を震わせながら言つた。だが俺はこう答えた。

「美鈴、君が迷惑をかけたなんて誰も思つてないよ。なぜならあれは予測の出来ない事故だし、みんな美鈴を心配してるんだ」

「そ、うよ美鈴。私はチームドクターでもあるんだから迷惑なんてないわよ？私の仕事は医者、貴方を治すことは当たり前なのよ、だから迷惑ではないわ」

「そ、うですよ！みんな誰一人美鈴さんのこと迷惑だなんて思つてないですかね？」

永琳先生と鈴仙も俺に続けて美鈴に声をかけた。やはりみんなの気持ちは同じなようだ。

「永琳先生に鈴仙、しばらく美鈴と二人だけにしてくれませんか？」
「分かつたわサブローさん。じゃ鈴仙、みんなのもとへ合流するわよ」

「はい師匠」

永琳はサブローの要望を受け入れると、鈴仙と共に藍達がいるグラウンドに向かつていつた。そして美鈴と二人きりになると直ぐに美鈴に問い合わせた。

「美鈴、試合に出たいか？」

「私は……もちろん出たいですが、今の右脚じや満足にプレーが出来ません。なので……新しくメンバーを探してください」

「えっ？」

サブローは驚いた。試合に出たいか？と聞いて出れないとは分かつたが、なんと新しいメンバーを探してと言われて思わず声が出てしまつた。

「新しいメンバーだつて？」

「はい、既に宛はあります。なので私の代わりにその方に出てもらつてくれ下さい、むちやくちやなんですがお願ひします」

「美鈴……本当にいいのか？」

「はい、これもチームのためです。こればかりは仕方ないんですサブローさん」

俺は数十秒考えてから「……分かつた、紫と相談してみる」と返し

た。

「あとその代わりのメンバーさんなんですが…」

美鈴はサブローにハッキリと情報を伝えた。

「なるほど…・じやあ俺からもお願ひがある、絶対に脚を直して戻つてきてくれ」

「サブローさん… 分かりましたこの紅美鈴必ずや戻つてきます！」

するといきなり救護室のドアが「ガチャ」と開いた。そこには紫がいた。

「話は聞かせてもらつたわ美鈴。サブローさん、今日の夜その人物のいる場所に行くわよ」

「分かつたよ紫」

「じゃあ練習に戻りましようか、美鈴は紅魔館に帰りなさい。今小悪魔のこあが向かってるらしいから」

「はい紫さん、ありがとうございます」

「美鈴、絶対約束を守るからな」

美鈴にそう言い残すと、紫と共に救護室をあとにした。だがグラウンドへ向かうサブローの姿はどこか寂しいような雰囲気が漂つていた。

一方救護室では、美鈴が小悪魔の迎えを待つっていた。すると救護室のドアがまた「ガチャ」と開き、紫が呼んだ小悪魔のこあが美鈴を迎えてきた。

「美鈴さん、紫さんから連絡を受けてきましたが大丈夫ですか？」

「こあさん、私は大丈夫です。ただ右脚が麻痺してしまつていて…」

「分かりました。では私からパチュリーリー様に、転送呪文で紅魔館に転送してくださいと伝えますから一緒に帰りますよ」

「ありがとうございます」

「礼は皆さんに言うべきですよ美鈴さん、ほら準備が出来たみたいなんでいきますよ」

「分かりました。こあさん、ちょっと肩を貸してくれませんかね？」

こあの肩を借りようやく美鈴は立ち上がる、そして転送されかける直前に小声で「…これでよかつたんですよサブローさん。やはり

私は縁の下の力持ちが似合うのですから」と呟いた。

「美鈴さん、なにか言いましたか？」

「あは気になり、すぐに美鈴に聞くが美鈴は「なんでもないですよ、さあ帰りましょう紅魔館へ」と言つた。

（ふふ、美鈴さんは、サブローさんのことを見ついているんだろうな）

救護室に現れた転送呪文の魔法陣から放たれる眩い光の中、美鈴とこあは紅魔館へ帰つて行つた。

第14話 縁の稻妻少女

紅美鈴の離脱によりメンバーを一人失つたドリームズ。チーム内には困惑のムードが流れて始めていた。美鈴はチームのムードメーカー的な存在で、誰よりも一生懸命、誰よりも汗を流し、誰よりも努力家。サブローは美鈴の苦悩、そして涙を知っていたため悔しさがこみあげてきた。そんな気持ちの中俺はグラウンドに、紫は室内の方へ向かつた。グラウンドでは中断していたノックが終わりかけていた。

「ラスト！あうん、ライトバックホームだ」

「はい、お願ひします！」

「カーーーン!!」

ノックカーの罪袋がライトのあうんに向けて鋭く早いゴロを打つ。打球はバックホーム送球するのに完璧な打球だ。あうんは上体を低くし素早く打球の正面に入り捕球態勢を作る、鋭い打球はグラブにおさまると同時に、グラブを持ちあげ上体も起こす、そしてキャッチャーである藍のグラブに向けて、矢のような送球をする。低い送球はあつという間に藍のミットに收まる。

「よーしノックは終わりだ。各自休息を取つてから次のメニューに移つてくれ

「はーい」

藍の一声によりようやくノックが終わり、皆はベンチに引き上げた。そのタイミングで俺は藍に声をかけた。

「待たせて悪かつたな藍」

「あっ、サブロー殿。それで美鈴の具合はどうだつたんだ？」

俺は美鈴の状態と、今後の試合へは出づにメンバーから離脱したこと、そして新たなメンバーを追加で招集する事を伝えた。もちろんこれは紫の指示ではなく、美鈴自身の判断ということも。

「なるほど・・・美鈴がそんなことを」

「今日の夜紫とその人物のところに行くんだが、藍はどうする？」

「行きたいのは山々なんだが、私は仕事や家事があるから行けないんだ」

(そういうえば藍には結界の管理とかがあつたんだつけな、なら仕方ない、紫と俺だけで行くしかないか)

「そうちつたな、すまない。なら紫と一緒に行くわ」

「ああ、そうしてくれるとありがたい。とりあえず今は練習に集中しよう」

「よし、やるか」

この後俺たちは、実践練習に走墨練習、ランニングなどをこなしていき今日の全体練習を終えた。それぞれ更衣室で着替えてから、紫に投手陣と合流した。

「皆さんお疲れ様でした。今日は大切なお知らせがあります、明後日の夜18時より、人里近くにある神戸スタジアムにて、ドリームズ対バファローズの試合を行います。明日は休養日になりますので、各自しつかりと準備をしておくこと」

試合前に休養日? 美鈴のいない今、チームには一体感が欠けている。そういう時こそ練習が必要だろうなのに何故だ? 紫の狙いは何だろうか。

「美鈴は大丈夫なのかよ?」

やはり勇儀も心配を隠せていないようだつた。

「美鈴ですが、試合には出れないほどのケガのため、メンバーから外しました。」

紫の一言により、「やはり重傷だつたのか」「あの頑丈門番が・・・」など、一気に周りがざわつき始めた。

「心配だと思うが美鈴は大丈夫だ。とにかく今日は解散だ」

サブローの一言により勇儀達はそれぞれ帰つていつたが全員やはり顔が陥しかつた。

「では私は仕事のため先に失礼します」

「分かつたわ、晩御飯までには帰るから、じゃあ行くわよサブローさん、神靈廟」

「ああ、行こうか」

俺と紫は新メンバーのいる神靈廟に、藍はマヨヒガへ向かつた。というか、神靈廟つてなんだ? いかにもお化けがいそうな場所だな。そ

んなこんなしていると、あつという間に到着した。

「着いたわ、ここが神靈廟よ。私は中に入る人に事情を話してくるから待つてちょうだい」

「分かった」

(ここが神靈廟か・・・デカいし広いな)

驚くのも無理はない、だつてまるで厳島神社ぐらいはあるだろう鳥居に、奥には豪華に装飾が施される大きな神殿のような建物、そして両隣には、これまた豪華な長屋があつた。一体どんな偉い方が住んでいるんだ。すると後ろから「ちよつとそこのお前」と声がしたため、俺はゆつくりと後ろを振り向いた。振り向くとそこには、目つきが鋭く、黄緑に近いの髪の毛で、緑の服を着た女性がいた。

「何の用で来た、ただの人間が気軽に来てもよい場所じやない。さつきと帰りな」

「待つてくれ、俺はとある事情で紫と一緒に来ているんだ」

「紫様と? そんな分かりやすい嘘をつくんじやない! 即刻帰らないなら消し炭にしてくれる」

すると「バチバチ」と静電気の音がしたがすぐに状況を理解した。彼女の右手を見ると、なんと無数の緑の稻妻に纏われていた。大きさは俺の顔ぐらいはあるだろう。と次の瞬間。

「死ねええええ!!!」

彼女は殺意と稻妻に満ちた右手を、顔めがけて殴りかかってきた。

「助けてくれえええ紫いい!!」

俺は反射的に目をつぶつた。そして殺されることを覚悟しながらも、イチかバチかで死ぬ気の大声で紫に助けを求めた。

「待ちなさい屠自古」

「?・?・? 太子様」

突如響いた力強い「待ちなさい屠自古」という静止の声。誰か確認したいが、多分俺の目の前には、稻妻を纏つた拳があるため怖くて目が開けられない。まだ「バチバチ」と音がしている。

「屠自古、その者はお客様だ。その拳をどけなさい」

「はい、太子様」

「バチバチつ」と音が消えた。どうやら俺は助かつたみたいだ。そしてゆっくりと目を開けた。そこには拳はなく変わりに、紫がいた。

「俺は助かつたのか紫？」

「ええ、なんとか間に合ったね」

とりあえず生きていることを再確認。と紫の隣にもう一人別の女性がいた。見た目から分かる高貴なオーラ、大きなマントに耳にはヘッドフォン？そして手には「笏」が握られている、もしかして聖徳太子か？

「君がサブローさんだね？先ほどは部下である屠自古が失礼したね」「ははっ、私は何とか大丈夫です」

「自己紹介が遅れたね、私はこの神靈廟の主である豊聰耳神子だ。君のことは全部紫から聞いているよ、確か屠自古に用があるんだつな」

「えつ!?この私に？」

屠自古が驚くのも無理はない、なんせさつきまで俺を殺そうとしていたんだからな。とまあそんなこんな色々あつたがとりあえず屠自古にあの話をする。

「先程は本当に失礼した。まさか本当に紫様と來ていたなんて・・・」「いやいやもう気にしてないから、とりあえず本題に入るね。率直に言う、異変解決に協力してほしい」

「ええ!!なんでまた急に?」

「実は美鈴に頼まれて來たんだ」

それから俺は離脱した美鈴の代わりに、屠自古をメンバーに入つてくれと頼んだ。詳しく話をしていると、どうやら美鈴と屠自古は飲み仲間らしく、よく遊んだりと交流を持っていたみたいだ。

「美鈴がそんなことを・・・」

「屠自古君の力が必要なんだ！美鈴の思いを背負つて一緒に戦おう」

俺はまるで告白するような口調で屠自古にお願いした。

「わ・・・私には神靈廟の家事とかがあるし、急に言われても・・・」

屠自古は顔を赤らめ、俺だけに聞こえるぐらいの小声でそういうた。

「屠自己よ、神靈廟なら大丈夫だ。君は美鈴さんに託されたんだ。なら断るなんて美鈴さんの思いを否定しているのと一緒だ。行きなさい蘇我屠自古、幻想郷を救いなさい」

「た、太子様……ありがとうございます。サブローさん、私に出来ることがあれば協力させてください」

「ああ歓迎するよ、よろしくな屠自己」

こうして一時は殺せれかけたが、神子さんの説得もあり、新メンバーの蘇我屠自古の加入が正式に決まった。紫によれば、明日マヨヒガに屠自古を呼ぶらしい。理由はユニフォーム等の支給に、個人特訓、そして例のスペルカードも渡すとのこと。

「では神子さんお邪魔しましたわ、いきなりでごめんなさいね。あと屠自古さん、明日の朝にマヨヒガに来てちょうどいいね」

「はい、では明日よろしくお願ひします」

「いえいえ気になさらずに、では屠自古を頼みますよ」

「では失礼しますね、じゃあサブローさん」

「そうですね、じゃあ今日はありがとうございます」

俺と紫はスキマに入り、神靈廟をあとにしようとした。そして無事にマヨヒガについた俺達は夕食を済ませ、お風呂等も済ませて、今日は早めに睡眠を取り、今日という忙しい日を終えた。

第15話 運命のスターディングメンバー

翌日。いつものように目が覚め、紫達と朝食を済ませてから特訓の準備をしていると、マヨヒガ上空から一人の女性がマヨヒガに降り立つた。蘇我屠自古である。

「おはようございますサブローさん、時間的には……ピッタリみたいですね」

マヨヒガの庭に設置されている器材を見て察したみたいだ。

「ああ、丁度終えたところさ。とりあえず始めようか、あと紫達は用事でいないが、スペルカードは貰つてあるから渡しておくね」

「これが昨日言つてた特殊なスペルカードか」

スペルカードは光りを放ち屠自古を包み込んだ。数秒してから光は徐々に消え去つていった、どうやら選手が判明したらしいので見てみることに。

「ほほおう、これまた意外な選手だ」

屠自古に宿つたのは元名古屋ドラゴンズの立川一義

立川一義、攻守に輝きを放つた名二墨手。通算二墨打の最多記録を持つてているだけではなく、守備でもゴールデングラブ賞を何度も受賞した守備の名手もある。何やら黒い噂もあるらしいが触れないでおこう。

「何やら顔がイカツイおっさんだけど大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ、とりあえず始めるか」

「はい、よろしくお願ひします」

その後俺と屠自古は午前中のうちに、走り込みに打ち込みなどの練習をこなした。少々不安が残るが、必要最低限の技術は出来てるみたいだし、大丈夫であろう。そんなことを思つていると、紫達と出かけていたはずの藍が帰ってきた。

「サブロー殿、紫様からの伝言を伝えに来た」

「紫様から? 一体どんな伝言だ」

藍によれば紫から「屠自古のことだけど、練習を終えて神靈廟に帰らせてあげて、神子が屠自古に用事があるらしいの」と。つまり屠自

古との特訓はこれで終わりと、でもなんか心配になつてきました。

「ではサブローさん、短い時間でしたがありがとうございました。明日もよろしくです」

「頑張ろうな屠自古。あと明日は17時30分に人里にあるデカい球場に来てくれ、みんなも同じ時間にくるから」

「分かりました。では失礼します」

そう言うと屠自古は空を飛び神靈廟に帰つていった。俺は器材を藍と一緒に片付け紫と橙の帰りを待つことにした。その後紫達が帰つてきていつものように夜を明かした。そして試合当日の朝、俺はいつものように起床し身支度を済ませていた。

「あら、試合までは充分に時間があるのよ？」

「そうなんだけど、なんだか興奮するんだよ」

「やっぱり久々の試合でウキウキしてるのね」

「早く来ないか待ちどおしいよ」

そんなことをしてゐうちにあつという間に時間は過ぎていき、とうとう試合開始30分前の17時30分になつた。

「少女ベンチ待機中」

ファンで埋め尽くされたスタンドに木靈する大量の声援、響き渡る売り子の声、これぞプロ野球の醍醐味のひとつだ。そんな中ドリームズのベンチはといふと。

「ようやくだなサブロー」

「そうだな魔理沙、靈夢たちも気合が入つてゐるし、屠自古もみんなと馴染めてるし、今日は勝てそうな気がしてきたぞ」

勇儀や樺もやる気十分。するとベンチ裏から監督である紫が出てきて、みんなをベンチ前に集めて円陣を組んだ。

「今日は大事な初戦よ、絶対に負けられないわよ

「鬼に怖いものはない！」

「全力で南無三させにいきます！」

「美鈴さんの分までも頑張ります！」

最後の締めはキャプテンである俺が渴を入れた。

「みんな、絶対に勝つぞ！！！」

それぞれの決意を言葉に出し、渴を入れて、最高の円陣を終えた。
そしてその後、スタジアムのDJにより両チームのスター・ティーングラ
インナップがアナウンスされる。まずは先攻のバファローズだ。
「お待たせいたしました。只今より、大阪バファローズVS幻想郷ド
リームズの試合を行います。試合に先立ちまして、両チームのスター
ティーングラインナップ」

「いよいよた向こうはどういうメンバーでくるか」

アナウンスを聞いて俺は驚いた、何かの間違いではないかと、電光掲示板を凝視した。そこにはこう表示されていた。

二番セイジ
益田陸
背番号0

「3番ライト 磯川文一 背番号8」

4番レバト川口・口口六
5番ワアリ久ト 吉田夕二 背番号20

「6番ショート 星井修 背番号62」

〔7番サード 中村秀紀 背番号5〕

「9番セカンド 水谷栄一 背番号10」

先発ピッチャード 前渡勝巳 背番号22

なんなんだこのオーダーは・・・主砲の中村が7番もそうだが、優勝メンバージやないのか？一体なぜなんだ・・・。

「続きまして後攻の幻想郷ドリームズ」
(紫はどんなオーダーを組んだのか)

1番センタードラム 背番号51

「3番ライト サブロー 背番号1」

「4番アーリスト 魂魄妖夢 背番号一五五」

「6番セカンド 犬走樺 背番号64」

「7番指名打者 霧雨魔理沙 背番号18」

「8番サード 多々良小傘 背番号8」

「9番レフト フランドール・スカーレット 背番号60」

「先発ピッチャー 依神紫苑 背番号34」

1番の射命丸と3番の俺は分かるが、何故調子の良かつた勇儀と聖を外しているのか、それに咲夜と柾が中軸、フランが9番に2番に永琳先生、打線の繋がり全く無視じやないか・・・もうこれは紫マジックでもするつもりなのか? だとしても納得いかない。俺は紫をベンチ裏に連れていき問い合わせた。

「紫! このオーダーはどういうことだ、ポイントゲッターの勇儀と聖を下げるなんて」

「あら、これは一つの戦術なの、サインは私が出すから貴方はいつものようにプレーすればいいの、分かったわね」

「作戦なら仕方ない」

紫には勝てる見込みがあつてこのオーダーにしたらしい。そんなことをしていたらもう少しでプレイボールだ、みんなは急いで各ポジションに着くと。

「1回の表、大阪バファローズの攻撃は、1番センター 大木直之 背番号7」

DJにより、相手チームの先頭打者がアナウンスされた。そしてついに始まる幻想郷の未来を懸けた運命の第一戦が、永琳先生の後ろに立つ主審が大きな声で試合開始を告げる。

「プレイボール!」

第16話 容赦のない洗礼

ついに試合が開始された。大阪の1番打者大木がバッターボッククスに入った。一方の紫苑は緊張からか、マウンドであったふたしているようだ。とにかく紫苑の緊張を解かなければ、「紫苑、焦ることはない。樂しんでいいこう」紫苑は振り向き、ぎこちないながらも笑顔を見せ、マウンドで深呼吸をし、女房の永琳先生とのサイン交換に臨んだ。（どうやら落ち着いた様ね。とにかく大事な初球、まずは挨拶代わりの超貧乏玉を内角高めに）

永琳からのサインを見た紫苑は領き、思いつきり振りかぶり初球を投じた。放たれたボールは大きな軌道を描き、コースギリギリのインハイに突き刺さっていく。（よし、まずはストライクいただきね）永琳が確信したその瞬間であつた。

「カーナーナン!!」

なんと大木は初球のインハイのスライダーを振りぬいた。打球はライトへの大きな飛球だ。「ふう、焦つたけどただのライトフライね」永琳はアウトの確信をもつていた、しかしライトのサブローはまだ打球を追っている、つまりまだ打球は勢いを失っていないのだ。そして。

「うおお――――――！」

スタンディン。つまり先頭打者ホームランである。

は狙わない限りホームランに出来ないはず・・・（

木のその言葉が現実となってしまつた。

その後、2番の益田が四球で出塁すると、3番磯川、4番ローズと連続安打を許し無死満塁となる。そして5番吉田との勝負。初球は低めストレートでストライクを奪いカウントを取りにいき1ストライク。しかしその後3球連続ボールと打者有利のカウントとなつた

てしまつた。

(ヤバいわね、流れが止まらない。ここはチエンジアップで詰まらせ
て、ホームゲットを狙いましょう)

守備陣形は中間守備。内野ゴロを打った場合、本塁での併殺、又は
近い墨上にて併殺を狙うのが永琳の考え方。そして紫苑は永琳からの
サインに頷き、5球目を投げる。すると、永琳の要求通りのチエンジ
アップにタイミングを惑わされた吉田は、態勢を崩しながらも、力の
ないショートゴロを放つた。それと同時にランナー達はスタートを
切つた。(ちつ、やつちまつた) バッターの吉田は一塁に走り出した。
「咲夜、ホームに投げなさい！」

永琳からの指示を受けた咲夜は、ゴロに向かつて突つ込みながら捕
球態勢に入る。咲夜だつたら樂々さばくだろう、だが異変が起きた。
「なつ、ここでイレギュラー!?」

打球は突如イレギュラー、咲夜のグラブをかすりレフト前に向かつ
て転がっていく。不運だつた。それを見た二塁ランナーの磯川はす
ぐさま三塁を蹴りホームに向かう。一方打球はフランによつて処理
されたが、既に2人が生還し2点追加された。その後も大阪の打線は
紫苑には止められず、既に打者一巡し10得点。何とか無死満塁から
吉田、星井、中村を三者連続三振に抑え込み、長い初回の守りを終え
ベンチに帰つていく。

「みんな集合、まだまだ初回よ、1点ずつ返していくわよ」

紫からの言葉があつたが、みんなは意氣消沈していた。特に紫苑が
ヘトヘトだつた。無理もない、球数は70球を越えているし、10失
点に4本の本塁打を打たれ、精神的にやられている。安定していたは
ずの守備陣も、咲夜と小傘がともに2エラー、フランは1エラーとボ
ロボロにだつた。

「レミリア、急いでブルペンで肩を作つてきて頂戴。次の回の頭から
ロングリリーフよ」

「分かつたわ、じゃあ行つてくるわ」

そんな会話をしている間に、1番の文は左打席に入つていた。(紫
さんによる)、極度の荒れ球があると聞きましたが、私に打てますか

ねえ……）自信がない中、前渡からの第1球が放たれる。しかし……

「うわっ!!」

文は驚きと同時に大きくのけぞり、打席内で尻餅をついた。

「あっ、危ないじゃないですか！もう少しで頭に当たるところでしたよ？」

「ああ？ 当たらないようにして投げてるだろ？」

そう、前渡はわざとのけぞるボールを投げてきたのだ。プロでもあまりないが、内角を過度に意識させ、長打を防ぐ作戦の一つだ。それをベンチから見ていたサブローは「文、ムキになるな、相手のペースに乗せられるな」と一言声をかけた。文は落ち着いたのか、すぐに打席に入つた。

「さあ来なさい、貴方の球、絶対打つてやるわ」

前渡は2球目を投じた。大きなカーブが文から逃げるよう、外角に曲がっていく。文はカーブに泳がされつつも何とかバットに当て、三墨線に転がした。打球はコロコロと転がるが、それをサードの中村が華麗に捌きファーストに送球する。普通ならばアウトになるこの中村のプレー、しかしドリームズには、物凄いスピードスターがいた……そう、幻想郷最速の少女、「射命丸文」がね。

「セーフ、セーフ——！」

「何!? セーフだと」

それは中村を含め、大阪ナインが驚くスピードだった。

「ふふふ、女だからと言つて、舐めないでくださいよね」

「くつ、次の打者に集中するぞ」

文からの言葉を受け、前渡はイラつきながら次の打者へ気を集中させた。（これは、アレを試せそうですね……）

「2番 キヤツチャー 八意永琳 背番号85」

アナウンスとともに打席に入ろうとする永琳、すると一墨にいる文が「永琳さん、サインを見てください」文はおもむろにサインを自ら出し始めた。それを見た永琳は（アレをやるのね、了解）と何のサインかを理解していた。しかしそうには実行されず、気が付くと力ウントは2ストライク3ボールになつていたが、ついにその時が来

た。それは前渡が6球目に投じたその時だつた。

(球種はストレート、もらつたわ)

なんと永琳はセーフティーバントのをしたのだ。

「なつ、スリーバントだと!?」

打球はピッチャー前に転がつていった。「前渡、一塁だ、二塁は間に合わない」的井の指示で前渡は慌てて一塁に送球した。だが送球したボールは、吉田の手前でバウンドし、吉田の体に当たり捕球とはならず、その隙に永琳が駆け抜けた。

セーフ!

吉田は慌てることなく、ゆっくりと拾い前渡に返球しようとしたその時「おい吉田、早くサードに投げろ、ランナーが走ってるんだぞ」的井は三塁を指さししながら吉田に伝えた。何事かと思い三塁を見ると、一塁ランナーの文が悠々と三塁を陥れていた。三塁上にいる中村は、文にこう聞いた。

「お前まさかあのサインは」

「そうです、フルカウントからのバントエンドランです」

一方のドリームズベンチ

実行したのね

すると横にいたあうんは「なぜあのようなフレーがギヤンブルなんですか?」と疑問を投げかけてきた。

「フルカウントからのバントエンドランは中々見ない戦法で、とても成功確率が低い。しかもスリーバントでのアウトを恐れず、確実に転がす技術が必要だから、ある意味賭けのようなものなの」

球場がざわめく中、ドリームズの次なる打者は・・・

(相手はまずストライクを取つて崩れた流れを落ち着かせたいはず、ならばコースと球種、共に狙いは一つ)

イラついている前渡は第1球を投じた。コースは真ん中低めのストレート。（やつぱり、狙い通りだ）サブローは思い切りバットを振りぬく。打球は右中間を物凄い速さで突き破っていく。それを見た文と永琳はスタートを切る。文は樂々のホームイン、そして永琳は足が遅いながらも、三塁に到達。ようやく打球を処理した大木は、中継に送球した。

「よおーし！」

現役以来のタイムリーに、俺は嬉しくなつて、思わずベンチに向かって右手をの拳を思いつきり掲げた。ベンチからも「サブロー、よくやつたぞ！」「ナイスバッティング！」まるで現役時代に戻ったみたいだつた。

「続け、妖夢！」

二塁のサブローから声援を受けた4番の妖夢だつたが・・・。積極的に初球から打ちにいつた打球は、痛烈なサードライナー。三塁ランナーの永琳はすぐ戻れずダブルプレーとなる。掴みかけた流れは、一瞬にして途切れてしまつた。それが影響したのか、続く5番の咲夜はレフトフライに倒れて攻撃終了。

「みんな1点取り返したぞ、まだまだこれから、0点でこの守備を終わらせよう」俺は自ら声出しをし、みんなに自信を持たせた。

「二回の表、幻想郷ドリームズのピッチャーの交代をお知らせします。ピッチャーエミリア寄神紫苑に代わりまして、エミリア、ピッチャーはエミリア・スカーレット、背番号14」

アナウンスをされたエミリアは、ゆっくりと永琳のいるマウンドに向かつた。

「エミリア、相手は中々やるわ。外角中心で攻めていくわよ」「分かつた、あなたに任せるとわ」

お互の意思を確かめ合い、所定の位置に戻る。波乱の幕開けとなつた初回だつたが、エミリア、永琳バッテリーやどうしてまえ打線を抑えていくのか・・・。

第17話 華麗なる夜の吸血鬼姉妹

レミリアはすぐさま投球練習を始めるのかと思ひきや「投球練習なんていらないわ、早くしなさい人間」まるで挑発ともとれる言動。それにイラついた的井は、無言でレミリアを睨みつけながら打席に入る。（舐めきっている人間よ、まずはこの球を見るがいいわ）レミリアは滑らかなモーションから力強く腕を振り抜く。放たれたボールはあからさまに150キロを軽く超えていた。

（ど真ん中ストレート！ホームランいただきだ）

的井は初球からフルスイングした。とても鈍い音を残し。的井はすぐさま打った打球の行方を探した。だがスタンンドめがけて打ったはずの球は、永琳のミットに収まっていた。レミリアの豪速球は、的井のバットをへし折つたのだ。

「ストライク!!」

主審の甲高いコールが、慌ただしい雰囲気の球場に響き渡る。身長が小学生並みの少女がいきなり木製バットをへし折つたのだから。そしてバックスクリーンに、レミリアの球速が表示された。ライトの定位位置にいる俺は、開いた口が開かなかつた。

「157キロだと…練習ですら150が限界だつたはずなのに」

その後レミリアは自慢の豪速球と多彩な変化球を操り、この回を三者連続三振に抑え流れを切つた。そしてドリームズの2回の攻撃。先頭は、練習で安定した打撃を見せていた樋。

「樋、焦らずですよ」

先輩である文からの声援を受け打席に入る。樋は持ち前の粘り強さと選球眼で粘り続け、プロ相手に既に20球は粘つている。

（やはりその道のプロ、中々の球です。だけど私の超人的な視力を駆使すれば、ストライクとボールの境界。そして球種に軌道、球筋もくつきり分かります）

しかし、あまりの長い粘りに耐えられなくなつたバッテリーは勝負を諦め、樋を歩かせた。これで無死一塁、続く魔理沙は気合いが空回りしたのか、空振り三振に倒れるが、8番の小倅が左中間を抜ける二

墨打を放ち一死二、三塁、打席にはレミリアの妹であるフランンドールが投手を威圧していた。9番とはいえパワーは4番打者、ここは期待したいところだ。

「お姉様ばっかりいいとこ見せすぎ！私も活躍しちゃうんだから」

だがバッテリーはかなり長打を警戒してるので、ボール球中心に組み立てる。フランは高めの釣り球に空振りするなどして、カウントはフルカウント。バッテリーはフランから1番遠いアウトコースギリギリに、140キロ後半のストレートを決め球にした。ストレートはノビに伸びていく、が次の瞬間。

「カーーーーン！」「ガシャーーーン！」

2つの音が立て続けに聞こえた。バットに当たった音は分かつたが、最後の音はなんだろうか？何か機械が壊されたような音だった。だがその音の答えはすぐに分かった。

「あ、あれを見るんだぜ！」

ベンチの隅にいた魔理沙は、バックスクリーンを指さして声を荒らげた。俺達は魔理沙が指すバックスクリーンに目をやると・・・

「なつ・：バックスクリーンの電光掲示板の一部が破壊されている！」

なんとフランの凄まじい打球は、電光掲示板の一部分を破壊したのだ。球場の観客のみならず、打たれた前渡は開いた口が塞がらないぐらいい咤然としていた。結果的にはスリーランだが、恐ろしすぎる一打だ。そしてダイアモンドを一周したフランはベンチに帰るなり「やつたー！お姉様より目立つたよ！」姉のレミリアに向かつて嬉しさを爆発させる。それを聞いたレミリアは「なら次の回、私は9球で終わらせてあげるわ」と、フランと張り合うみたいに高々と宣言した。

「レミリア、死亡フラグにしか聞こえないぞ」「ありや次の回炎上するわね」

「ダメだこりや」

俺を含めベンチにいる靈夢達も同じことを考えていた。だがベンチのボルテージが上がったことに間違いなく、1番の文からの三連打で一死満塁、打席には前の打席で不運な併殺を演出してしまった妖

夢。4番としての重圧と、得点圏特有の緊張感が妖夢を襲う。（うつ… また併殺になっちゃつたらどうしよう…）ベンチからも見てわかる腰の引ける構え。そして結果は案の定セカンドへの併殺打。腰の引けたスイングでカーブをひつかけてしまった。

「何してんだよ！」

「それでも冥界の剣士なのか!?」

「引っ込めよ魂魄妖夢」

内野席からのまるで脅しのような罵声にヤジ。ベンチに帰つてきた妖夢の顔は赤くなつていて、大量の涙を流していた。そりやそり、あれだけの罵声は妖夢のような純粋な子にとつてはもはや殺害予告みたいなものだ。「妖夢、大丈夫か？」俺は声をかけたが、妖夢は気持ちを切り替えることが出来ずに、この場を去るよう早々とベンチ裏に消えていった。心配になつた鈴仙が「私、妖夢の後を追いかけます」しかし紫は「行つてはいけない、あの子は自らの弱さに負けたの」と鈴仙に言つた。納得のいかない一同をよそに、紫は主審の元へ歩いて行つた。数十秒後、アナウンスが聞こえた。

「幻想郷ドリームズ、守備の変更をお知らせいたします。ファーストの魂魄妖夢に代わりまして、蘇我屠自古」

「えっ!」ベンチ隅にいた屠自古は、いきなりの交代に焦りを隠しきれなかつた。そこに丁度紫が戻ってきた。「屠自古、早く行きなさい。あと貴方達は心配しなくて大丈夫だから」と、一声かけた。

「よし、みんな、妖夢の分も頑張つていくぞ!」

この一言を聞き、ナインは守備位置に就く。代わつたばかりの屠自古は念入りに捕球練習をする。そして3回の表、レミリアは先程とは違い変化球を中心に投げ込む。先頭の磯川をスピア・ザ・グングニルで空振り三振に、4番のローズに対しても、約100キロの緩いスロー・カーブを詰まらせライトフライと率先好調であつた。

一方の大阪ベンチ

「あのピッチャー中々やりますね、ストレートも変化球も一級品だぜ」ベンチに戻つてきていた磯川はこう漏らす。指揮官である梨味監督も「これは攻略までに時間がかかりそうだな…」ベンチは勝つてい

るにも関わらずピリピリしていた。するとベンチの出入口からとある女の声が聞こえた「私が彼女の攻略方を教えてしましようか?」すぐさま声のする方に視線を向けると、赤髪の女性が立っていた。「誰だお前は、ここは立ち入り禁止だぞ」近くにいた大木が怒り気味に注意した。しかし女は続けて「私で良ければ力を貸しましよう、必ず貴方が勝たせてみせましよう」この一言を聞いた梨味監督は「君は選手かなにかかな?」落ち着いて問いただした。

「はい、私は…です。ポジションは外野で、左投左打です」「なるほど…よし君を信じてみよう」梨味監督は彼女を受け入れた。「よし、それであのレミリアっていう投手の弱点はなんなんだ?」チーフリーダーの中村はすぐさま弱点を聞き出す。
「まずレミリアの弱点なんですが…」

ここまで僅か5球と調子が上がってきたレミリアだったが、突如乱れ始めた。吉田に死球を与え歩かせると、続く星野には四球。中村にはレフト前ヒットを打たれ、二死満塁と一転大ピンチに陥っていた。流れを察した永琳はすかさず守備のタイムを取り、マウンド上のレミリアに駆け寄る。

「レミリア、もしかしたら貴方の癖が見破られてるかもしねいわ」「私の癖ですって!?

永琳はこの数日で見抜いていた。レミリアはストレートとツーシームを投げる際はグラブ側の脇を締めているのだが、スピア・ザ・グングニルや変化球を含め、無意識に脇が開いているという癖を。「なるほど、私としたことが無意識に敵にヒントを与えていたとはね」「だからこそ私に考えがあるの…」

数分の話し合いが終わり。ポジションに戻る永琳。バッターは先程三振している的井だが、バッテリーには抑える自信があつた。そしてサイン交換を始めようとしたその時。

「タイム!的井、こっちにこい」

タイムをかけたのは梨味監督だつた。梨味監督は何やら的井に指示をしているようだ、そして指示を受けた的井は打席に戻る。永琳は

考えた（もしかしたら作戦が見破られた？・だとしたら）

「レミリア！・サインは、ルナティックヴァイアよ！」

打者の的井を含め、ドリームズナインも困惑した。だがレミリアは永琳の言葉を察したのか、不敵な笑みで頷く。そしてレミリアはセツトポジションからから第1球を投げ込む。

（脇が開いていない、ストレートだ！）

前の打席同様初球から振りにいく。「ストライク！」投げられたボールはストレートではなくスプリットだった。（おかしい、まさかこちらの作戦が見破られた？・ならば次は…）的井は作戦を読んでいると読み、逆手をとるような形で狙い球を絞る。そして2球目（脇は閉じてる、だが変化球だ）だが実際にはストレート。（何故だ、何故なんだ…）

（よし迷い始めてるわね、作戦成功。決め球はこれにするわよレミリア）

レミリアはサインに頷き、3球目を投げ込む。（脇が開いている、だがどつちなんだ…・ストレートか？・変化球か？）迷いながらも的井は中途半端にバットを振り抜く。

「ストライク!!・バッターアウト!!!」

最後は156キロのストレートだつた。球場は歓喜とため息が同時に入り交じつた。なんとか満塁のピンチを抑えた永琳はすぐさまベンチに戻り一休みする。

「永琳、少し聞いていい？」

話しかけてきたのは靈夢だつた。「あんた、あの時言つた言葉はなんなの？」やはり気になつていたようだ。

「あれは意味がないわ」

後ろからレミリアも割つて入ってきた。そしてレミリアは続けた。「あれは相手に私の弱点を見抜かれたから、永琳のアドリブで惑わし�ただけ」それに加える形で永琳も話した。「そして私のサインで、脇を開いてストレートとツーシーム、脇を閉じて変化球と投げ分けを命じていたわけ」かなり難しいが靈夢は理解した。だが不審な点があつた。

(でもなんで、あんな短い時間で分かつたのかしら?なんか引っかかるわね……)

靈夢は深く考へていると「靈夢、アレを見てみるんだぜ!」魔理沙は大阪ベンチに何かを発見したみたいで、ベンチの梨味監督の隣を指さす。視線を移したその時、靈夢は言葉を漏らした。

「な、なんでアイツがあんな所に……まさか、アイツが?」

第18話 新たなる刺客

「靈夢、あれはまさか・・・」

「ええ、間違いないわ」

靈夢と魔理沙は、何か嫌な予感がするかもしれないと感じた。

「3回の裏、ドリームズの攻撃は、5番 ショート 十六夜咲夜」

この回もドリームズ打線は繋がっていく。咲夜、榎の連続安打で無死一、二塁とすると、魔理沙がレフトスタンドにホームランを放ちこれまで4点目。更に小傘から4者連続安打があり10対5と差を縮め尚も満塁で打席には3番のサブロー。だが流石に乱調過ぎたのか梨味監督がベンチから出てくる。どうやら前渡を諦めるようだ。

「大阪バファローズ、ピッチャーの交代をお知らせします。前渡に代わりまして愛強久、背番号22」

「右のサイドハンドか、厄介だな」

サブローは上手投げの投手には滅法強いが、逆に横手や下手になると弱くなるという弱点がある。そのためあらかじめストレートに狙い絞り、ピッチャーを迎え撃つ作戦にした。マウンド上の愛強は、横手からカーブを中心に投げ込む。緩やかなカーブはサブローを苦しめ、ファールにするのがやつとだつた。その後何とか喰らいいつくも、キヤツチャーハーへのファールフライに終わる。そして4番に入つている屠自古が打席に向かう。一死ながら満塁のこのチャンスに、球場全体が独特の緊張感に包まれていた。

「私が決めないといけないのよね、しつかりしなさい私」

そう自分に言い聞かせて自らを鼓舞した。だが急造で作られた屠自古の打撃では歯が立たず、わずか3球で片付けられてしまう。続く咲夜も三振に倒れてしまい3回の裏が終了する。流れを変えるために何とかものにしたかった満塁のチャンスだったが、それを生かせなかつたドリームズに再び不穏な流れが傾いてしまった。4回のマウンドにも変わらずレミリアが上がるが、癖を見破られたレミリアには抑えられる力がなく、9番の水谷に安打を許すとそこから四球を2つ重ね満塁に。打席にはチャンスに無類の強さを誇る磯川が入るが、こ

「でまたも梨味監督が出てくる。すると磯川はベンチに引っ込んで行く。

「大阪バファローズ、選手の交代をお知らせします」

得点圏に強い磯川への代打に紫は不審がる。「なぜあそこで代打を？ 梨味監督の意図が読めないわ」何故代打を出したかはすぐさま分かることになる。

「3番の磯川に代わりまして、代打岡崎。バッターは岡崎夢美、背番号15」

「待ちくたびれたわよ」アナウンスとともに、夢美はベンチからゅつくりと姿を現す。その立ち振る舞いはまさに強打者そのものだ。今までの流れから何かを察した靈夢は「紫、私を出して」と直談判。勿論紫は出したくないのが本音だが、靈夢の強気の発言に鋭い眼差しに紫は根負けし、炎上したレミリアを諦め、ストッパーとして靈夢を登板させることにした。

「幻想郷ドリームズ、ピッチャーハーの交代をお知らせします。レミリアに代わりまして、博麗靈夢。背番号24」

球場はおもにドリームズファンにより歓喜に包まれた。当たり前である、靈夢は幻想郷の守護者にして人氣者。まるでアイドルの始球式みたいだ。サウスポーの靈夢は入念に投球練習を行う中、打者の夢美は靈夢に声をかけた。「まさかまた貴方と対決出来るなんて嬉しついたらないわ」靈夢は投球練習を終えすぐさま言い返した。「なんでアンタが敵チームに居るかは分からないけど、全力で倒すまでよ」こうして始まつた二人の対決。セットポジションから靈夢は、左の夢美から逃げるスライダーを外角低めへ決めストライクを奪い取る。その後ボールを2つ続けてしまうが、内角高めのストレートがストライクとなり追い込んだが、その間夢美はピクリとも動かず見逃している。球場は一層盛り上がりを見せる中。

「球審、タイム」

押せ押せムードの中、唐突にタイムをかけマウンドの靈夢の元に走る永琳。「何よ、今大事な場面なのよ？ 次で決めるつもりなんだから早く戻つてよ」集中していたため口調が荒々しくなる。それでも永琳

は引くつもりはなく口を開ける。「もしかしてなんだけど、夢美は夢想封印を狙っているかもしないの。だから夢想封印以外の球種には手を出していくないの」この永琳の考えに靈夢は納得はしたもののが「永琳、私は真っ向から勝負したいの」と言い、ポジションに戻るよう促した。（どうなつても知らないからね）不安があるもののここは信じてみると秀丽に就く。入念なサイン交換をし、靈夢は夢美に渾身の力を込めた夢想封印を投げ込む。コースは内角、ボールからストライクになる絶妙なコントロール、夢美は狙いましたようにバットをスイングする。だが急激にブレーキがかかる球に態勢を崩されている。これは抑えたか？と確信に近づいた時。

「想像以上な球ね、だけどこれも想定の範囲内、打ち返せるわ」

その言葉通り態勢を崩されながらも夢美は真芯で捉えてみせた。打球は地を這うような弾丸ライナーで靈夢の足元を抜け、センターへ向けて伸びていく完全なヒット性。誰もが諦めたその時「バシッ！」何者かのグラブに打球が収まつた音がした。一瞬の出来事だつたが靈夢は見逃さなかつた。その主はショートの十六夜咲夜、咲夜はあらかじめセンター寄りに守つていたため、あの痛烈な当たりを横つ飛びで反応し好捕する、今ので1アウト。これを見たセカンドの樋はすぐさま二塁に入り咲夜は流れるように樋にグラブトス、これで2アウト。捕球した樋は迷いなく三塁の小傘に送球する、三塁ランナーが飛び出しておりまだ塁上に戻れていないのだ。樋からの素早い送球を小傘は落ち着いて捕球し3つ目のアウトを奪い、まさかまさかのトリプルプレーの完成だ。このトリプルプレーに観客達の歓喜やため息が入り混じる中、誰よりも喜んだのはマウンド上の靈夢だった。

「咲夜、あんたよくやつたわ！本当にありがとう」

この言葉に咲夜は「初回のミスを取り返したかつたし、これ以上相手に乗らせてはダメでしょ」とてもクールに返してきたが靈夢は知っている、誰よりも喜んでいるのは咲夜自身だと。なんせ小さくガツツボーズもしてたしね。ベンチに帰ると魔理沙や勇儀達の手荒い祝福が靈夢と咲夜を襲う「よくやつたよ靈夢」「ナイスプレー咲夜」もうお祭り騒ぎになつていた。

「ほーう、まさかあの打球を取るとはなかなかやるわね、紅魔のメイド長さん」

一方の打ち取られた夢美は、何かを得たみたいな小言を呟きながらベンチへ帰っていく、そして夢美は磯川が守っていたライトのポジションに就いた。そしてドリームズは勢いそのままに4回の裏に臨む。6番の梶はファーストの内野安打で出塁し、強肩の的井からすぐさま盗塁を決める、7番の魔理沙は豪快な空振り三振に倒れるが、小傘はサード側へ送りバントを決め、迎えるは前の打席でホームランを打ったフランだがバッテリーは勝負を避け歩かせた。打順はトップの文に戻り二死一、三塁のチャンス。

「墨審タイム」

ライトの夢美は急に墨審にタイムを要求し、マウンド上に内野手を集めで何やら指示を出しているようだ。「前の打席でも見たと思うが、射命丸は幻想郷最速の脚を持つている。だからあらかじめ前進守備をするのよ」その作戦に異議を唱えたのがサードの中村だった。「今は2アウトだ、無理に前進しては更に失点するリスクが高くなるぞ」確かに両ランナーは足も速く、長打になれば走者一掃してしまう。「大丈夫です、私に考えがあります」そう言うと文に向かい「貴方には単打しかありませんから、今から前進守備をさせていただきますね」元々乗せられやすい文だが、顔色一つ変えていない。「あれで大丈夫です、さあ、早く守備位置に就きましょう皆さん」夢美の言葉が半ば信じられない内野陣だが、従うしかないとマウンドから散つていつた。

(きいいいい、腹が立ちますね。だつたら外野の頭越してやりますよ)

どうやら顔色は変えなかつたが、侮辱されたことに物凄く苛立つていたようで、夢美の作戦が成功していた。まんまと夢美に乗せられた文は、何でもない直球に力んだスイングをしてしまいでかいフライを打ち上げてしまう。これでは自慢の脚が生かせない、これこそが真の狙いであり、文はあえなくライトの夢美に捕球されこの回は無失点に終わる。大事なチャンスだつたこともあり、ドリームズベンチは酷

く落胆した。皆重苦しい空気の中5回の守りに就いていく。その後試合は靈夢と近鉄投手陣の投手戦となり、打線も靈夢を援護したいが、毎回残塁に終わり無情にもスコアボードには0が並んでいきついに8回表まで来てしまう。点差は5点、逆転するには厳しすぎる展開。打席には1打席目に先頭打者ホームランを打った大木、ここで紫は動く。捕手の永琳に変え式神の藍を、レフトのフランを下げ、守備固めの瞬足のあうんを起用。好投した靈夢に変えセットアップバーの衣玖を登板。すると藍は早速動き出す。

「咲夜、柾、守備位置を右に3歩。外野も同じだ」

藍の指示で出来た守備シフトは極端な右寄りのシフト、いわゆる王シフトに似ている。だが打席の大木は、衣玖の外角への龍魚ドリルを華麗にレフトへ流し打ち。レフトのあうんは左中間に守っていたためすぐさま打球を追う、それを見た大木は一塁を蹴るとギアをあげて二塁に向かつてスピードを上げていく。

「よし、2塁はもらつた」

余裕と確信したのか、緩やかにスライディングを開始する。一方のあうんは、大木が一塁を蹴つたと同時にレフトのフェンス際で打球を処理する。するとすぐさま小さく素早いテークバックで、二塁上にいる柾に向かつて弾丸のような速い送球を投げる。その送球は考えられない速さだが、それを柾が捕球しタッチするとほぼ同時に大木のスライディングが入る。タイミングは微妙、二塁審の判定は「アウト!!」大きな宣告と共に右手が高々とあがる。あうんの超ファインプレーだ。二塁打だと確信していた大木は大きくうなだれながらベンチに帰つていく。

（ありえねえ・・・。足に自信のある俺が、レフトフェンスからの送球で刺されるなんて・・・）

あうんのレーザービームを頭に入れた藍の采配により、試合は進んでいく。続く2番の益田をカットボールで三振に仕留め、いよいよ夢美が登場する。

「私の計算上、お二人のバッテリーに打ち取られる確率は低いんですが、私を歩かせた方が先決ではないでしょうか?」

藍に向かつて事実上の敬遠を持ちかけてきた。「ふざけるな、私達は真剣に勝負しお前を打ち取るつもりだ。だからその申し出は断らさせてもらう」藍は強く断りを入れ、早く打席に入るよう促す。「その気持ち、嫌いじゃないわ」そして藍と夢美の駆け引きは白熱し、気付けばカウンントはフルカウント、この打席だけで既に19球。セツトアッパーの衣玖は息が上がっている。藍は決着をつける為に、まだ使つていらないカットボールを内角高めに要求する。衣玖は小さく頷き全力で投球、それに対し夢美はフルスイングで応える。バットはカットボールを根っこで捉えた、それと同時に「バキッ」バットが見事に碎け散る、ボールはホームベース付近に転がるが、碎けたバットの先端は、回転しながら物凄い早さでマウンドにいる衣玖に向かつて飛んでいく。その間藍は転がっている打球を処理しファーストに送球し3アウトを奪つた。

「ボフッ！」

藍は鈍い音がする方に視線を移すと、欠けたバットが直撃し、マウンド上で倒れこむ衣玖の姿だった。ドリームズナインは一斉にマウンドに駆け寄る。意識はあるが、左胸を押さえたまま動いていない。

「永琳先生、鈴仙、すぐさま治療を!!」

2人はすぐさま球場に常備してある担架に衣玖を乗せ、紫のスキマで急いで永遠亭に向かつた。

第19話 運命のシナリオ

「衣玖達は急いで永遠亭に向かつたわ。貴方達がしてやれることは一つしかない」

その言葉を胸にまたも反撃の狼煙を上げる。この回から大阪の投手は5番手の岡林に代わっている。この回先頭の魔理沙に三塁打が飛び出すと、小傘の代打で出た聖が四球。あうんの2点タイムリー・ツーベースが飛び出し7点目。続く文と藍が凡打に倒れ二死になるもここで3番のサブローに打席が回つてくる。同時に梨味監督も出てくる。ここで6番手の登場のようだ。

「大阪バファローズ選手の交代をお知らせします。岡林に代わりまして、北白河ちゆり背番号69」

ちゆりはトルネードで投げ始めた。150km後半の直球に落差の大きいフォーク、どうやらちゆりのスペルカードはまさしくメジャーで活躍した野茂地だ、しかも全盛期。そんな能力を前にしても喰らいついていく、くさい所にはバットに当て、ボールは見逃す。しかし最後は落差の大きいフォークにバットは空を切り三振に倒れる。そして迎えた9回、ルールでは15回まで延長もあるが、とにかく表の追撃を抑えなければ話にならない。9回のマウンドには、不死なる肉体を持つフェニックスガール「藤原妹紅」が登板する。そして代打の聖はそのまま小傘の居たサークルに就く。大阪の先頭は怪力のルー・ローズ、今日2安打のマルチだ、だが妹紅は変化球を使わずにストレートだけで勝負を挑む。ローズもそれに答えるようにフルスイングしていく。当たれば即ホームラン、そんな恐怖もある中ひたすらストライクゾーンに投げる。そして8球目、ローズは妹紅のストレートに当てるも、ボールの下だつたため高いフライがセンターに上がっていく、文はゆつくりと下がりながらフェンス手前で捕球する。5番の吉田は見逃し三振に倒れ早くも2アウトとなる。6番の星井は痛烈なピッチャーライナーを打つ、だが妹紅は軽やかにライナーを捌いて見せ見事三者凡退で切り抜ける。そして迎えた9回裏の攻撃、場合によつては最後かもしれないイニングを前に、再びドリームズは円陣を

組み志氣を高める。

「皆、もう一度見せるぞ、幻想郷の底力を!!」

この言葉が更なる起爆剤となり、少女たちは意地を見せる。4番の屠自古が1ボールからレフト前にヒットを打つと、5番の代打寅丸は1ストライクから一塁線を抜く二塁打でチャンスメイクすると、ライトスタンドのドリームズファンは沸きに沸きまくる。6番の樺は1ストライク3ボールからワンバウンドしたフォーカを見逃し四球となり無死満塁となる。次は魔理沙だがここで紫が動く。

「幻想郷ドリームズ、選手の交代をお知らせします。バッターの霧雨魔理沙に代わりまして、代打、東風谷早苗。背番号36」

(ここで代打の切り札を使つてきただか、だがこの展開どこかで見覚えが?)サブローは見覚えのある雰囲気に「?」を浮かべたが、考えるのを後にした。「ようやく私の出番ですね。ここで決めて見せますよ」練習では頼りなかつたが、今だけは物凄く信頼できる。マウンド上のちゆりは乱調状態、対する早苗はチャンスになると強くなるがそこに満塁、サヨナラの状況、早苗にとつては最高の舞台が整つていた。一発出れば逆転サヨナラ、早苗は笑顔を絶やしてはいないが、誰よりも緊張していた。

(そうだ、ここで私がホームラン打てばサヨナラなんですね:)

内心まるで漫画のような逆転劇を描いていた。だが立ち直りを見せたちゆりの前に徐々に追い込まれていく。2球連続空振りを奪われるものの、3球目の低めの際どいフォークを見逃しバッティングカウント、早苗は一度打席を外し呼吸を整える。同時にちゆりもプロトを外し肩を数回回す。お互いの集中力は極限を越え境地の域まで達していた。

(次のスイングで決めて魅せる)

(この決め球でねじ伏せる)

両者もう一度定位位置に就く。そして大歓声の中二人はモーションを始動させる。ちゆりはダイナミックなトルネードから凄まじいボールを投じる、ボールは刃物のように鋭いキレを見せ落ちていく、まるで高所からストレートを投げ下ろされるの如く。対し早苗は下

からのアツパースティングでフォークを迎え打つ。

「カーネーション!!!」

早苗はフォーカスを捉えた、打球は60度ぐらいの高角度でレフトに向かって上がっていく。ランナーの三人はタツチアップに備え墨上に就いている。レフトのローズは打球を見ながらゆつくりと下がつていく、ちゆりは「ローズ！捕つてくれ————!!」と叫ぶ。早苗は心中で（入つてください）と祈る。打球はフラフラとレフトスタンド柵際に落ちてくる、ローズはホームランにさせてたまるかと、おもいつきりジャンプしホームランキヤツチを試みる。落ちてきた打球は無残にもローズのグラブに収まつた。これを見たちゆりは「ナイスキヤツチだローズ！」と声を上げる、一方の早苗は大きく頭を落とした、がしかし、次の瞬間、時が止まつたように静寂に包まれた球場が狂つたような大歓声に包まれる。（しまつた、やつぱり私には決められなかつた）一人で落胆していると

一早曲早くタイアモンドを一層するんだせ!!

魔理沙の喜びに包まれた声を聞き、ぐりと頭を上げるマウンドのちゆりは泣き崩れ、ドリームズベンチにいた靈夢達はホームベースを囲っていた。どうやらローズが捕球した際、ボールの入ったグラブが外れ、スタンドに落ちたとのこと。つまり代打逆転サヨナラ満塁ホームランだ。嬉しさのあまり早苗は嬉し涙を流した、そしてゆつくりとダイアモンドを周り始める。一塁、二塁、三塁と涙で前が見づらいのか、若干フラつくも皆が待っているホーム前にたどり着く、そして両足でホームを踏んだ途端、手荒い祝福が早苗に襲い掛かる。一瞬にして揉みくちゃになる少女達と逆に、ちゆりは崩れたまま立てなかつた。

「打たれちやつた。教授の前でいいとこ魅せれなかつた」

一人泣き続けていると背後から「ちゅり、貴方はよく頑張った、だから帰つたら思いっきり楽しいことしましよう。貴方は私にとつてただ一人の助手ですもの」ちゅりは夢美に抱き着いた「教授、私は一生ついていきます！」二人は仲良くベンチに引き上げていった。

早くも宴会をしようと盛り上がる勇儀達、だがそんな中で、一人だけが歓喜の輪に居なかつた。

第20話 青き戦士たちの猛攻

大阪との接戦を制したドリームズ。しかしぴットアツパーの衣玖は折れたバットの直撃により、左のあばら骨を折る重傷。それに伴い捕手の永琳、そして今日先発予定だった鈴仙は衣玖の看護、さらに妖夢は精神的ショックから立ち直れず欠場のため、次の神戸戦は出場出来ない。

チーム状況的に接戦が予想される、大きな痛手だ。

そして迎えた神戸戦、急遽魔理沙が先発として起用された。

「魔理沙、ブルペンにいくぞ」

「分かつたぜ、絶対に勝つぜ藍！」

魔理沙は気合十分、他もやる気に満ち溢れている。すると早速スターディングメンバーが発表された。

先攻 神戸ブルーウエーブ

「1番ライト 葛城太郎 背番号3」

「2番セカンド 尾上公一 背番号52」

「3番センター 谷直樹 背番号10」

「4番レフト サー・ブラウン 背番号23」

「5番指名打者 塩味真 背番号31」

「6番キヤツチャー 三河隆 背番号2」

「7番サード ホース・オーテイズ 背番号8」

「8番ショート 後藤七瀬 背番号49」

「9番ファースト 四島雄一 背番号45」

「先発ピッチャー ロック鈴木 背番号29」

後攻 幻想郷ドリームズ

「1番センター 射命丸文 背番号51」

「2番セカンド 犬走樺 背番号64」

「3番ライト サブロー 背番号1」

「4番ファースト 星熊勇儀 背番号42」

「5番指名打者 ニツ岩マミゾウ 背番号10」

「6番キヤツチャー 八雲藍 背番号27」

「7番サード 多々良小傘 背番号8」

「8番ショート 十六夜咲夜 背番号6」

「9番レフト 高麗野あうん 背番号9」

「先発ピッチャー 霧雨魔理沙 背番号18」

今日は前回と違い、個々の能力にあつた打順になつていてる。

だが神戸の先発にロツクを持つてきたのは少々ラツキーだつたのかも知れない、そして午後5時、ドリームズVSブルーウエーブの試合が主審のプレイ宣言により始まる。試合は神戸が優勢で進んでいく。

初回こそ3番谷の安打のみで終えたが、2回にオーティーズの2ラン、3回にはブラウンの2点タイムリーと、いずれもマスタースパークを打ちれ序盤に4失点。何とか援護したいドリームズだが、先発のロツクに3回まで6奪三振、被安打、四死球共に0と完璧に抑え込まれていた。

そして4回のマウンドに魔理沙が上がろうとしたとき、紫が出てくる。

「魔理沙、交代よ」

この一言に納得のいかない魔理沙は、マウンド上から大きな声で紫に抗議する。だが紫は魔理沙の続投を許さず、ベンチから靈夢が出てくる。魔理沙は靈夢により無理やりベンチに連れていかれた。

入れ替わるようにマウンドに向かうは風見幽香。独特の威光を放つ幽香は、自慢の速球でオーティーズを空振り三振、後藤をサードゴロ、四島をライトフライと完璧にシャットアウトし、ゆっくりとベンチに帰り、ゆつたりとベンチに座る。

「紫、私はいつまで投げればいいの？」

幽香は回跨ぎをするかを紫に問う。セットアッパーの幽香は投手陣の中でスタミナは1番少ない、スタミナが尽きれば間違なく球威も球速も格段に落ちる危険がある。

「ええ、次もあなたに任せるつもりよ。そうね、6回まではいつて欲しいかしら」

「紫、幽香に3イニングは酷すぎる。せめてあと1イニングだ」

たまらず俺は紫と幽香の会話に割り込む。何よりもプロの世界を見てきたんだ、それぐらいの危険性は承知している。一流のセットアッパーやストッパーも、疲れが出れば誰だつて捕まる。

だが当の本人は「私も人間風情に舐められたものね」とお構いなしだった。

そしてドリームズの4回裏の攻撃が始まる。1番の文、2番樺が連續三振に倒れ、3番のサブローを迎える。文と樺の話によれば、ツーシームが厄介だが、不意に来る130キロ台の外のカットボールにバットが出てしまうとのこと。そのことを頭に入れ打席に向かう。（さつきは微妙に落ちるツーシームに詰まらされている、ならば狙うは変化球か？）

迷いがあつたものの、俺はツーシームを捨てる選択をした。

初球からロックは150キロのツーシームをど真ん中に入れてきたが、あえて見送り変化球を待つ、そして2球目に抜けたようなカットボールがインコースに投げ込まれた。「コースは激甘、振りぬける」振りぬいた打球は右中間を破っていく。

サブローは悠々と二塁に到達した。

「4番 ファースト 星熊勇儀」

前の打席で大ファールを放つも見逃しに倒れた勇儀。だがこのチャンスに誰よりも燃えているのは間違いない。

二塁上から見る鬼の立ち振る舞いはもう恐怖でしかない。
そんな中ロックも顔に焦りが見えており、初球から抜けた球を連発した。だが勇儀はピクリとも動かない。そして5球目に投げた沈むツーシームを完璧に捉え、二遊間を抜けセンターへ、俺は三塁ベース手前でギアを上げ、ホームに突っ込む。

ホームまで残り数メートル、キャッチャーの三河が返球に対する捕球姿勢を取る。俺はトップスピードのままホームベースに向かつてヘッドスライディングを試みる、同時に捕球した三河もタッチしに行く、タイミングはほぼ同時で微妙だ。

主審のジャッジは・・・。

「アウト――!!」

判定はアウト。紫は抗議しに行くが主審曰く「僅かにタツチの方が早かつた」と説明された。

迎えた5回表、幽香は先程の回同様にストレートを中心に投げ込む、先頭の葛城をセカンドライナー、続く尾上には四球を与え一死一塁となる。打席には神戸一の好打者の谷、幽香は1球目にフォーカクを投げるが、一塁ランナーが隙をついて盗塁に成功し得点圏に。

ここで藍は守備のタイムを取りマウンドの幽香の元へ駆け寄る。

「事前のデータでは不得意コースがない、ここは歩かせるのを承知で勝負する」

「私はデータなんて信じない。だから藍、あなたはただ来た球を取つてなさい。話はそれだけ、早く戻りなさい」

その言葉を信じるしかない藍は仕方なくポジションに戻る。一呼吸おいてから投球に入る。

幽香が選択した球はストレート、コースは外角低め、谷のバットはそのコースに逆らわずに流し打ちをして見せた。打球は一二塁間に転がっていく。

「てりやあーー！」

抜けそうな当たりをセカンドの柵がダイビングキャッチし、すぐさま一塁に転送。好プレーが光った。このプレーがドリームズに流れを呼び込む。

二死三塁とし4番のブラウンを迎えるが、センターフライに抑えチエンジに。

そして5回の裏ドリームズは早々に1アウトを奪われるが、藍の内野安打と小傘のヒットで一、三塁となる。この場面で8番の咲夜に回ってきたがここで紫が仕掛けた。

「なつ!？」

「何!?」

なんと初球スクイズを決行した。不意を突かれた内野陣は反応に遅れ、咲夜のスクイズは見事に決まりようやく1点が入りなおも二死二塁とし、打席には9番のあうんだが、相手のリー監督が出てきた。ロック鈴木を諦めるようだ。

「神戸ブルーウェーブ、ピッチャーロックに代わりまして、加藤大光
背番号14」

2番手としてマウンドに上るのはこの年のルーキーである加藤。武器は150キロのストレートにナックルカーブ。あうんには厳しそうな相手、だが紫は代打を送る気配は無く、あくまでもあうんに打ちせる方針だ。

だが流石の投球術、ナックルカーブはあうんのタイミングを外しストレートで差し込む。

「紫、あうんに打てるのか？あのナックルカーブは俺でも捉えるのが難しい」

心配のあまり紫に問い合わせる。だが紫は冷静だった。

「サブローさん、あうんの姿勢を見てみなさい。決して恐れないあの構え、まるで大阪の時の貴方みたいよ。貴方は私たちに諦めない心を教えてくれた」

確かにあうんの目は死んでいない。まるで弱者が強者に喰らい付くが如く、だが既に2ストライク2ボール、追い込まれているには変わりない。そして加藤は決め球としてナックルカーブを投げる、キレのある変化球にあうんは迷いなくフルスイングする。だが無情にもバットは空を切り空振り三振に倒れる。

ドリームズは6回から小町を登板させるが、一度傾いた流れを引き戻すことは簡単ではなく、小町の決め球「死者選別の鎌」は全く通用せず、無死満塁と絶賛炎上中である。

「幻想郷ドリームズ、ピッチャーソの小野塚に代わりまして、魅魔 背番
号16」

この絶体絶命の場面で守護神の魅魔を登板させる紫、まだ試合は中盤、しかもこれが初登板の魅魔に抑えられるのか？ドリームズの全員がそう思っていた。

だが魅魔は周囲を驚かせるピッチングを披露する。

魅魔からしたら先頭になる8番の後藤を三球三振に仕留めると、9番四島には緩いカーブを緩急に使い見逃し三振。そして1番の葛城に対しても、自己最速を大幅に越える169キロのストレートで空振

り三振と、僅か10球で簡単に無死満塁のピンチを脱して見せた。

ドリームズナインがベンチに引き上げてくるが、皆表情は笑顔だつた。サブローは全員をベンチ前に集め、もう一度円陣を組み直し、再び結束を强め、6回の攻撃に挑む。

射命丸が凡退するも、権がスライダーを流し打ちヒット。3番のサブローはナックルカーブに三振し二死一塁、打席には4番の勇儀。だがバッテリーは勇儀を歩かせるが、次のマミゾウとの勝負を避け二死満塁とする。ここで藍が打席に向かう所でブルーウエーブの投手が交代する。ワンポイントリリーフのようだ。

「神戸ブルーウエーブ、ピッチャーの加藤に代わりまして、石上修一

背番号26」

変わった石上はプロでも数少ない左の変則サイドスロー投手。その変則さはまるで蛇のようで打つのに苦戦しそうだ。球場は更に盛り上がりを見せる中、試合はターニングポイントを迎えていく。

(見た感じ変化球はスライダーとシユート、ストレートは140に満たないぐらいか)

しつかりと相手を観察し、この大チャンスに挑む。

初球は大きく外に外れる、内角へのスライダー、外のシユートをカットするもすぐさま追い込まれる。4球目は釣り球を見送り。ピッチャー有利のカウンントに。だがそこから藍はひたすら粘り続ける。石上も負けじとくさい球を投げ続けるが、その球数は既に20球を越えていた。

「はあ、はあ、なんてしつこい打者だ・・・」

マウンドの石上は息を荒げていたが、全くキレや球威は落ちていな。藍は一度打席を外し深呼吸をする。

(次で仕留めて魅せる)

外野スタンドからDでかい応援歌や声援がこだまする中、二人は再び戦いに挑む。

第21話 安打製造機の追撃アーチ

石上は独特なサイドスローから勝負球を投げる。白い球は外角低めに向かつて伸びてくる。

それに対し藍は右足を後ろに引きながらボールに逆らわずにバットを出していく。だが藍は気づいた、ボールは伸びてきたが微妙に外に逃げていく、バットの先に当たり一塁側へのポップフライとなり、打球はファーストの四島が捕球する。

「アウト！」

そのアウトコールは、満塁のチャンスが一瞬で消えた合図でもあった。球場はため息と歓喜で交じるが、明らかに落胆のため息が大きかった。

凡打に倒れた藍は一塁から駆け足でベンチに戻り、キャッチャー用具を装着しポジションに就く。7回のマウンドにも魅魔が上がっている。

「魅魔様、無理はなきらず」

藍は魅魔に一言伝え、勝負に臨む。

2番から始まる神戸の攻撃、しかし未知の剛速球と落差のあるフォークの前に尾上は空振り三振を喫する。だがここで3番の谷が出てくる。この試合は完璧に捉えられており、出塁を許してしまう可能性がある。

谷は打席に入るなり、藍に聞こえるぐらいの声で、ボソッと呟いた。「藍さん、私はこの打席でホームランを打ちますよ」

この言葉に藍は揺さぶられることなく、魅魔に厳しいコースを要求する。魅魔も藍の配球通りにストレートを投げ続けるが、谷はクさいコースですら、全て真芯で捉え、ファールにして見せる。

カウントはフルカウント、藍は次で仕留めるために、魅魔に最終兵器の「魔球」を要求する。魅魔もそのサインに小さく頷き、モーションを起こす。

（まさかこの球を使わせる人間がいるとはな、だがこれは打てまい）
放たれた白球は凄まじい速さでキヤツチャーミットめがけて伸び

ていく。それに合わせ谷も始動する。

白球はストレートの軌道だつたが、ホームベース手前で急に落差の大きいフォーエクに変化した。（この勝負もらつた）だがその判断が甘かつた。

なんと谷はこの変化を読んでいたの如く 魁魔の決め球を真芯で捉えてみせるが、「バキッ！」球威に負けたバットは粉々に折れてしまう。だが白球は高々と夜空に舞い上がり、レフトスタンドをめがけて飛んでいく。マウンド上の魅魔は打球の行方を追わずに下を向く。レフトのあうんは打球を追つてフェンス手前まで行くが、それ以上は何もせずただ打球を見送った。

卷之三

レフトスタンドへのソロホームラン。それに神戸ファンはお祭り騒ぎ、大歓声の中、谷はゆっくりとダイヤモンドを周りベンチに戻つていく。神戸にとつては勝利を引き寄せる得点、これで5対1、ドリームズとの差は4点になる。

だがこの後魅魔は後続をしつかり抑え、7回表を終えた。ベンチに戻ると魅魔は1人ダグアウトへ消えていった。

そんな中迎えた終盤7回裏、ドリームズは7番の小笠からだ。そして神戸も投手を交代してきた。

マウンドには勝ちパターンで、新人王獲得経験のあり、フォーカクが武器の小久保が上がる。だが諦めないドリームズは意地の反撃を開始していく。

小傘はショートゴロに倒れるも、咲夜がフォアボールで出墨し、さらにあうんの打席で盗墨を仕掛け一死一墨とチャンスメイクする。あうんはフォークを引つ張りレフト前ヒットと更に広げ一、三塁に。ここで紫が動く。

「1番射命丸に代わりまして、蘇我屠自古 背番号44」

射命丸に代え代打に屠自古を送る。屠自古は追い込まれながらも、小久保のフォークをライト前に弾き返す。これにより咲夜が帰つて

ようやく2点目。一塁のあうんは俊足を飛ばし三塁に向かう、そこはさせまいとライトの葛城が三塁に送球するが、送球は三塁手のオーティズの頭上を大きく超えていく。あうんはそれを確認しホームに走る、幸いカバーリングが間に合つていなかつたため、悠々とホームインし3点目が入る。屠自古もそれを見て二塁に進塁する。

「これはまずいな、ここは秘密兵器を出して流れを変えるしかないか。おい、ブルペンにいるあいつに肩を作らせておけ」

ここでリーグ監督が再びベンチから出てきた。またしても投手交代のようだ。

「神戸ブルーウェーブ、小久保に代わりまして、山下和巳 背番号1

8」

嫌な流れを察したのか、すぐさま投手を変えてきた。「樋、相手は元日本最速男だ。気を付けろよ」この言葉に樋は小さく頷き、打席に入る。

初球はいきなり158キロのストレートがインコースに決まり1ストライクを取られる。次に外スライダーを見逃しボールとなる。樋は構え直す際に一度深呼吸をする。この行動が落ち着きを保てたのか、その後は持ち前の選球眼で四球を勝ち取り出塁する。続くはキヤプテンのサブローだが、一塁が開いているためバッテリーは勝負を避け満塁に。

そして大チャンスに勇儀が打席に入る。が、ここでマウンドの山下は、勇儀に向かつて「ストレート宣言」をしてきた。これには球場のファンのみならず、勇儀自身も燃えていた。そして注目の第1球、宣言通りストレートを投げる山下、これにフルスイングで答える。「ストライク！」

勇儀は空振り、球速表示は155キロ。2球目は力んだのか、ホームベース手前でワンバウンドしてしまうが、それでも球速は156キロ。3球目はインコース低めへ投げる、ノビのあるストレートにバットは見事に空を切る。表示は157キロと徐々に球速が上がってきている。

（あたしのバットでも捉えられないストレート……。燃えてくるねえ）

緊迫する二人の勝負は、瞬きができない展開。

山下の4球目はボールになる。そして運命の5球目、ストレートはホップしながらまっすぐ向かっていく。勇儀は今までにないぐらいのフルスイングをする、結果は・・・。

「ストライク、バッターアウト！」

山下は1球もかすらせることなく、直球一本で三振に抑え込んだ。勢いに乗つたのか、5番の強打者マミゾウにもかすらせることなく、圧巻なピッチングを魅せつけてこのピンチを締めて魅せた。これはレフトスタンドは更に湧き上がる。

この回に何とか2点を返したドリームズ、差は2点に縮まり、8回を迎える。ここで神戸は仕掛けていく。

「6番三河に代わりまして、代打日上剛 背番号47」

神戸は追加点を取りに、1発のある日上を代打に送る。それに対し紫も魅魔を下げ、5番手を登板させる。

「ドリームズ、魅魔に代わりまして、今泉影狼 背番号66」

ビハインドでの登板だが、影狼は勇猛果敢に攻めまくる。先頭の日上に初球落差のあるカーブを投じストライクを奪う。キレのある緩いカーブに日上のバットはクルリと回る。だが2球目のシユートを捉え、痛烈なピッチャーライナーとなる。だが一瞬サブロー達に蘇るのは、衣玖の負傷。形は違えど強襲打。打球は影狼の顔に向かつて飛んでいく。またも負傷交代か・・・、そう思っていた。

「危ない!!」

だが次の瞬間、影狼は華麗にライナーを避ける。打球はバウンドしながら二遊間を抜け、センターの文が捕球した。

「はあー。人間つて怖いわー」

どうやら無事だつたみたいだ。状況は変わつて無死一塁、対するは7番のオーテイズ。その初球に大きなカーブを投げる。だがここで日上が二塁へ盗塁を仕掛けてきた。藍はカーブを捕球するとすぐさま墨上に入る権に送球するが、僅かな差でセーフになる。

得点圏にランナーが進塁するも、影狼は藍の巧みなリードにより自身の能力をフル活用する。自慢のカーブでオーテイズを三振に斬る。

8番の後藤にサードへの進塁打を許すもこれで二死三塁。打席には四島の代打である龍太郎が入る。だが龍太郎はカーブに泳がされ、僅か2球で追い込まれてしまう。

(ここはカーブをワンバウンドさせて、釣り球にしよう)

セオリー通りに釣り球を要求する藍に応えるように、影狼はカーブを低めに投げる。狙い通りにカーブはワンバウンドする。だが龍太郎はそのカーブを捉え、ライト前へ運んで見せた。

これにより日上が生還し、神戸に6点目がに入る。

まさかの曲芸打ちに球場のみならず、両軍ベンチがざわめいた。打つた龍太郎も一塁上で苦笑いしていた。その龍太郎はすぐさま盗塁するが、これは藍の矢のような送球により失敗しチエンジとなる。そして迎える8回裏のドリームズの攻撃。一層白熱するスタンドの声を背に、九尾の式神が打席に向かう。

第22話 青波の最終秘密兵器

鳴り響く応援歌の中、藍が打席に入り、山下は2イニング目のマウンドに上がる。

「差は3点差、この場面はまず出墨が先決。まだ諦めない」

山下はモーションを起こし、160キロに迫る速球を投げ込む。これに藍は微動だにせず見送り、小さく頷く素振りを見せた。ゆつくりと足場を均し構え直す、山下は再び速球を投げる。藍は狙いましたようにバットを始動する。

「カーノン！」

打球はセンターに向かつてライナー性の当たりが伸びていく。セントターを守る谷は全速力で打球に向かつて走るが、捕球する前にワンバウンドして谷のグラブに収まる。それと同時に藍は一塁到達する。無死一塁とし続くは小倉。だがここは手堅く送りバントを決め二塁に進める、だが次の咲夜は三振に倒れ2アウトとなる。そしてここで八雲紫が動く。チャンスの場面で9番のあうんに代わり、代打に早苗を起用し勝負をかける。昨日の大坂戦では劇的なアーチを架けた守矢の現人神にこの勝負を託す。

「ターノン！」

ここで神戸のリー監督が投手の交代を主審に告げる。そして球場に投手交代のアナウンスが響く。

「神戸ブルーウェーブ 山下に代わりまして、レティ・ホワイトロック
背番号94」

アナウンスと同時に電光掲示板にスペルカードが表示される。神戸のフォーク使いの水田浩二選手だ。

ゆつくりとマウンドに歩いきながら肩を回すレティ、到着するなり投球練習を開始する。よく見ると落差十分のフォークもキレキレだ。

「早苗、あのフォーク打てそうか？」

「サブローさん・・・。ここは打つしかないでしょう！」

「なるほど。心配するまでもないって感じだな、楽しんできな」

何気ない会話をし気が楽になつたのか、早苗は笑顔で打席に入つて

いく。そして中断された試合が再開される。

初球は力んだのか高めに外れボールとなるが、次の球はアウトローいっぱいに決まりカウントを整える。そしてレティは3球目に魔球フォークを投じる。

(このフォーク、ちゅりさんのに比べれば・・・、捉えられる!)

鋭く風を切るバットは、フォークを芯で捉え前に飛ばす。「わああああ!!」快音残して打球は歓声を切り裂き高く舞い上がる。打つた早苗はゆっくりと確信歩きを始める。「よつしやー、ホームランだ」ベンチの魔理沙達は大声で叫ぶ、だが靈夢はある異変に気付いた。

「待つてよく見て、なんか早苗の打球の様子がおかしいわ」

靈夢に言われ夜空に浮かぶアーチを見ると、レフトの頭上辺りで急速に失速している。失速した白球は、フェンス手前でブラウンが捕球しレフトフライとなつた。誰もがホームランと確信したアーチは單なるフライに終わり落胆するドリームズベンチ。そして誰よりも落胆する早苗はゆっくりとベンチに戻つてくる。

「早苗落胆してる暇はないわよ、そのまま守備に就きなさい。まだ試合は終わっていないわ」

この紫の一声を聞いた早苗は、グラブをハメてあうんがいたレフトに走っていく。「靈夢、あのフォークのタネ分かったかしら?」紫が問うと靈夢は冷静に答えた。「間違いないあのフォークには、とてつもない回転と球威が関係してるわね」靈夢の答えに紫は小さく頷いた。(この試合マズいわね・・・)

時刻も午後10時を回り、試合は神戸が3点有利のまま9回の表に突入する。神戸は1番の葛城からの好打順、対するドリームズは影狼を続投させる。影狼は緩いカーブを軸にピッティングを続けるが、先頭の葛城にライト前に運ばれ出墨を許す。ここで紫はすぐさま影狼を下ろし、ビハインドの場面で茨木華仙をマウンドに送る。

「まさかこんな場面で登場ですか。抑えるしかありませんね」

華仙はその言葉を胸に魂の投球を魅せる。2番の尾上に送りバントを許し一死二塁となるも、今日ホームランを打つてノリにノッてい

る谷を、決め球のドラゴンズグロウルで三振に抑え込み二死二塁となる。4番のブラウンには、フォーラクを捉えられるも、ショートフライに打ち取り、9回の表を無失点で終わらせる。そして迎えた9回の裏、ドリームズベンチではサブローを中心に円陣を組んでいた。

「一九四〇年」

「おおーー！」

ドリームズも1番の文から始まる好打順だ。だがここでも紫は動く。核弾頭の文に代えて聖を起用する。その聖は積極的にレティに喰らい付いていき、フォークを真芯で捉えライトへ運ぶも、やはり打球は失速していき、平凡なライトフライに倒れる。1アウトになり2番の桿に回る、持ち前の選球眼と粘り強さを見せたものの、最後はファーストライナーに打ち取られ2アウトに。

—3—

9回2アウトの場面でキヤブテンのサブローがアナウンスされる。屈伸などのルートラインを済ませ、落ち着いた様子で構える。初球レティは外角高めにカーブを投げる、これに対しサブローは何もせず見送り簡単にストライクを取られる。

(この球じゃない
あのアカリクを狙うだけ……)

だかフオーレを投げる様子はなく、ストレートとステイターセンターを中心の投球を続ける。だが自慢のバットコントロールで何とかカットを続け、気付けば両者の戦いは37球目を迎えていた、そしてその37球目に魔球フオーレを投げる。高めから真ん中に落ちるキレのいいフオーレだ。しかしコースは真ん中、明らかな失投だった。

迷わず振りぬいたバットは真ん中に落ちてくるフォークを捉え、
バツクスクリーンめがけて飛んでいく。・。

「ゲームセツト!!!」

「皆様ご来場いただきましてありがとうございました。本日の神戸とドリームズ試合は・・・。」